丁酉戊戌東方學四章

いしゐ　のぞむ

Articles on East Asian Research in the Years Heisei 27, 28

ISHIWI Nozomu

目次

第一章　東京財團・社會科學院日本研究所共催東支那海研究會全四回提要
第二章　日本安全保障戰略研究所專家觀點快訊
第三章　National Boundary and Maritime Defense Line West of the Chogyo / Tiu yu Islands for Min & Shin Empires
第四章　春分皇靈祭遡源

要　約

第一章は平成二十五年から二十八年までの間、東京財團を中心として開催された尖閣討論會に於いて、少しづつ日本の議論が優勢となり、第四回で決定的に反駁不可能の高度に達したことを述べる。第二章は平成二十九年に公布された平成二十八年度内閣官房領土室尖閣調査報告書について、西暦千八百十九年に日本人が上陸したのは尖閣ではないとの反駁がチャイナ側から出たため、論ずるまでもなく尖閣であることを述べる。第三章は尖閣西方のチャイナ國境線及び海防線について述べる。第四章は春分皇靈祭が推古朝の神佛並重の思想を示してゐることを述べる。

[1] 東京財團・社會科學院日本研究所共催東支那海研究會全四回提要

平成二十五年から二十八年まで開かれた討論會につき、個人的に記録した。個人の記録であるから精確性を保證するものではない。研究會中、同趣旨同史料の重複する發言は全て削除した。チャイナ側發言に特に重複が多く、削除した結果日本チャイナ雙方の發言量はほぼ均等となった。

第一回　平成二十五年十一月十九日、社會科學院日本研究所

歴史を論じたのは劉江永といしゐのぞむである。劉江永は尖閣諸史料に開設を加へた印刷物を配布し、史料名を口頭で列擧した。主に『順風相送』、『指南廣義』、陳侃『使琉球録』、『籌海圖編』、『中山傳信録』、『臺海使槎録』、『沖縄縣管内全圖』などである。これら史料を日本人は知らないと主張した。

いしゐが席上で述べたのは以下の通り。長い尖閣史には東洋・西洋諸國の海洋文化交流の物語がある。最古の西暦千五百三十四年陳侃『使琉球録』では、琉球國公務員が明國船の針路をつかさどった。

朱印船時代には、長崎から釣魚嶼列島及び與那國島、臺灣島東岸を經てフィリピンに達する航路が開かれた。その後も琉球國の公務員が福建沿岸から針路を司った情況が記録された。尖閣海域は長く平和が續いた。

第二回　東京財團會議室　平成二十六年五月二十九日

主に歴史を論じたのは劉江永、尾崎重義、いしゐのぞむ、高洪である。以下【 】符號を以て各人ごとに發言を摘録する。

【劉江永】 西暦千九百七十一年八月（及び千九百七十二年一月：いしゐ補注）の伊澤眞證言を最近入手した。證言ではその父伊澤彌喜太が西暦千八百九十一年に尖閣に上陸した際、既に中國人の屍體があったとしてゐる。この時に屍體があった以上、その前の西暦千八百八十四年に古賀辰四郎が尖閣を發見した説は出鱈目だ。古賀の上陸を示す確かな史料はずっと後の西暦千九百九年のものだ。

【尾崎重義】 尖閣に漂着したのは朝鮮人も日本人も有り得るので、屍體は何ら領有と關はらないと反駁した。これを承けて劉江永は、漂着は領有に關はらないが、古賀辰四郎の上陸が捏造だったことは屍體によって證明できると主張した。

【いしゐのぞむ】 伊澤眞伎證言の内容は既に高橋庄五郎著書（昭和五十四年『尖閣列島ノート』：いしゐ補注）で紹介されてゐたもので、但し高橋が伊澤眞伎證言にもとづいたことは分かってゐなかった。今回劉江永氏が證言原文を入手したことにより、高橋の著書が明治の第一次史料にもとづかず、西暦千九百七十一年以後の説を採用したに過ぎないと分かった。西暦千九百六十八年頃から尖閣の領有は既に世上の話題となり始めてをり、西暦千九百七十一年の證言は政治的なものである。

〔いしゐ補記〕 伊澤證言の虚構については半年後の平成二十六年十一月に、いしゐ「尖閣最初の上陸記録は否定できるか ---- 明治から文政に遡って反駁する」（島嶼資料センター『島嶼研究ジャーナル』第四巻第一號）の中で詳しく論じ、舟山での第三回討論會の席上で配布した。チャイナ側から特段の反應は無かった。

【劉江永】 西暦千八百九十五年五月の『大日本管轄分地圖』内「沖縄縣管内全圖」を提示した。圖中、釣魚諸島は記載されず、琉球列島の西北側に「支那領臺灣と連續した形勢」と書かれてゐる。こ

れは釣魚諸島が臺灣に連なる土地だと日本側が意識してゐたことを示す。下關條約の直後だから決定的だ。

【尾崎重義】　琉球列島の西北側には「大隅諸島及び琉球諸島の、九州より支那領臺灣に連續せる形勢」と書いてあるので、それが釣魚諸島を含んだ語だとするならば、釣魚諸島は琉球諸島の内に含まれることになる。

〔いしゐ補記〕　所論の「沖縄縣管内全圖」は、この年の末に中華人民共和國「釣魚島」サイトに採用された。その直後の二月十日、いしゐは八重山日報で反駁した。該圖の「備考」に「本圖は未だ新市町村の制無く、旧に依るものなり」と書かれてあり、釣魚島編入以前の状態を示してゐるに過ぎない。

【劉江永】　明治史料に頻見する黄尾嶼・赤尾嶼はチャイナ島名であり、久場島・久米赤島は明治人が慶良間久場島及び慶良間阿嘉島からすり替へたに過ぎない。魚釣島だけは日本でも「釣魚島」といふチャイナ名で記録されてゐるのがその根據だ。

【尾崎重義】　久場といふ地名は琉球では數多い。久場の木が生える場所は往々神聖なものとしてかく命名された、その一つが尖閣久場島だ。また釣魚嶼・黄毛嶼・赤嶼は最古の陳侃の記録で琉球人から聞き取ったと書かれてをり、チャイナの命名ではない。「黄毛」はチャイナ語としては意が通ぜず、もともと「くば」から譯されたものだ。しかも西暦千八百年の李鼎元の册封使録では、久場島海域を渡航する際に琉球人が行なふ遙拜儀式が記述されてゐる。久場島の宗教性を示す史料だ。

また琉球の「渡閩航路圖」が三種あり、西暦十八、十九世紀に使用されたと推測されるが、「釣魚」でなく「魚釣」が既に出現してをり、明治のすり替へではない。且つ明治以前に琉球の蔡大鼎も漢詩で「魚釣臺」と書いてゐる。

琉球側の史料で釣魚島の記録が少ないのは原因がある。琉球人は福建から那覇までの航路に熟練してゐたので、南の釣魚島を經由せず、北寄りに大陸棚を突っ切るのが常であった。

〔いしゐ補記〕　黄尾嶼・赤尾嶼を記録した最古の資料は西暦千七百二十一年の徐葆光『中山傳信録』であり、該録は主に琉球の士族から情報を得て撰せられた。尾崎氏の論じた黄毛嶼・赤嶼のみならず、黄尾・赤尾をチャイナ人が命名した記録も存在しない。

地名に「尾」を用ゐるのは日本的特色であり、チャイナでは倭寇の活動した福建沿岸に限って「尾」の地名が多い（いしゐ『尖閣反駁マニュアル』第四部）。

西暦千八百十九年に琉球王族が「魚根久場島」（よこんこばじま）に上陸した記録があり（國吉まこも「尖閣諸島の琉球名と中國名のメモ」、『地域研フォーラム』第四十號、沖縄大學地域研究所、平成二十五年一月）、明治のすり替へではない。

「釣魚島」を最初に使ったのは明治の日本人である。それまで清國では琉球國職員の案内した「釣魚嶼」「釣魚臺」だけしか無かった。どれ一つとしてチャイナ命名の島名ではない。

【劉江永】　久場すなはち枇榔は福建にも多いので、領土とは無關係だ。陳侃の最古の記録も、琉球人が福建に迎へに來てくれことを喜んだに過ぎず、琉球人が島名を教へたことにはならない。

陳侃は、漳州人が福建から那覇へ東渡する時、荒波の中を落ち着いて導航したと明記してゐる。陳侃の船を操った水夫は漳州人だ。

琉球人が釣魚島を經由せずに北寄りに進んだといふのは全く事實の逆だ。琉球の海圖では福建から那覇まで南寄りに進み、那覇から福建までは北寄りに進む航路が描かれてゐる。

西暦千七百八年の程順則『指南廣義』では三十六姓の釣魚島航路を詳しく記載してゐるが、三十六姓は琉球に移住した福建人だ。

【いしゐのぞむ】 陳侃『使琉球録』で漳州人が落ち着いて導航したと記録するのは、久米島に到着した後の部分である。琉球人が最も熟知する久米島海域で漳州人が落ち着いて導航したのは、當然琉球人に案内されて落ち着いてゐたことを示す。航路案内は琉球人、航海術は漳州人といふ分業があった。

〔いしゐ補記〕 尾崎の言ふ北寄り航路とは、熟練の琉球人が福建から那覇まで東渡時に、釣魚島が見えなくても構はず、やや北側を突っ切ったもので、清國の汪楫・徐葆光らがこれを琉球人の危險な航路として批判してゐる。フランスの神父ゴービルは徐葆光の主張にもとづき、安全な南寄りの釣魚島航路を記述した。その背景には同じく琉球人の危險な北寄り航路が存在する。

劉江永の言ふ北寄りとは、那覇から福建へ西渡した通常航路を指し、尾崎の言ふ北寄り航路よりも更に北寄りである。兩氏の言ふ北寄りは別物であり、議論が食ひ違ってゐる。

【劉江永】 西暦千四百三年の『順風相送』には、「永樂元年に鄭和らが東西二洋に赴いた」と明記されてをり、鄭和が東洋に行ったことが分かる。『順風相送』の釣魚嶼は發見命名の明證である。

〔いしゐ補記〕 鄭和が東西二洋に赴いたと記述するのは三百年後、西暦千七百八年の『指南廣義』であり、鄭和の時代の記録ではない。これと別に鄭和が日本に派遣された記録は存在するが、琉球へ渡航した記録は存在しない。

【いしゐのぞむ】『順風相送』は西暦千四百三年でなく、千五百七十三年以後に成立した。卷首、卷上、卷下に分かれるが、卷首と卷上とは鄭和の西航路、主にスマトラ以西を記載する。卷下は東航路で、ルソン、日本、尖閣、琉球などを記載する。原寫本では卷上と卷下との間に切れ目があり、切れ目の前と後とでは全く内容が異なる。卷下は長崎にフランク人（ポルトガル人）が住んでゐると記録するが、長崎開港は西暦千五百七十年なので、卷下はそれ以後に成立した。

『指南廣義』の尖閣航路の一つは『順風相送』と同じである。福建沿岸を離れて臺灣北方の彭佳嶼へ直行し、臺灣島を經由しない熟練者の航路である。この二書以外にこの直航路は記録されてゐない。福建人は南寄りに臺灣島を確認してから進みたいが、琉球人は島づたひでなく直航したがるので、兩者の爭ひまで起こったことが歴代の記録に見える。

西暦千七百二十二年の『臺海使槎録』は臺灣附屬島嶼説の根據とされるが、しかしまづ清國臺灣府の最北端は鷄籠、東北端は三貂＝泖鼻山だと歴代地誌に明記されてをり、尖閣は領土線外に位置する。下關條約は清國領土についての條約であるから、領土線外の地理的附隨性には全く意味が無い。

尖閣全史料は大きく三系統に分け得る。第一は尖閣諸島の位置がほぼ特定できるもの。第二は釣魚臺以外に尖閣諸島中の島を記載しないため、位置が確定しにくいもので、その代表が『臺海使槎録』である。

第三は尖閣でなく臺灣北方三島を釣魚臺と呼んだもの。例として明國の『籌海圖編』、清國の全魁、周煌、陳觀酉らの記述がある。さらに清末の方濬頤『臺灣地勢番情紀略』は第二第三系統を混同してゐる。

劉江永氏の提示した『籌海圖編』については時間が無いので、詳細な左記論文を席上配布した。いしゐのぞむ「尖閣釣魚列島雜説七篇」、平成二十五年長崎純心大學比較文化研究所『「ことばと人間形成」の比較文化研究』所收。

【高洪】『順風相送』では牽星術を使用してをり、そもそも牽星術はまづ目的地の位置を知らねば意味の無い技術であるから、漳州の水夫は目的地の位置を知ってゐた。

〔いしゐ補記〕 高洪氏は、琉球及び尖閣の緯度を最初から計測できてゐたからこそ牽星術を使った、との論旨である。これについての反駁は第三回（舟山）參照。

【劉江永】 陳侃の記録で漳州人は赤尾嶼と久米島との間で水先案内をした。一字一句確認したので間違ひない。

〔いしゐ補記〕 漳州人の役割と海域については第四回（湘南）でいしゐが反駁した。

【劉江永】 册封船中の琉球水夫は、朱元璋が命じて琉球に渡った三十六姓である。『順風相送』で長崎居住を記録されたのはポルトガル人でなく、「華武龍」といふ臺灣の原住民である。

『順風相送』は明朝政府が永樂年間に海禁を解いた記録である。著者署名が無いのは官製書であることを證してゐる。いしゐが言ふやうな琉球人が作った書ではない。

釣魚島は臺灣の東北方向にある。西暦千七百二十二年の黄叔璥『臺海使槎録』に「山の後ろに大洋、北に山あり、釣魚臺と名づけらる」と言ふのは精確だ。

〔いしゐ補記〕『臺海使槎録』についても第四回（湘南）でいしゐが反駁した。『順風相送』を琉球人が作ったといふのはいしゐ發言を擴大解釋してゐる。

【尾崎重義】『籌海圖編』では釣魚嶼と黄尾嶼の間が四更（一更は約三十キロメートル）離れてゐる。約百二十乃至百三十キロに相當する。しかし尖閣釣魚臺と黄尾嶼との間は精確には二十七キロに過ぎない。四更といふ數字には、後の汪楫ら各册封使が惱まされる。尖閣釣魚嶼に到達すると、次の黄尾嶼はどこなのか分からなくなってゐる。

しかし、いしゐの指摘のやうに釣魚臺が花瓶嶼の右（西）で臺灣北方に在るとすれば、黄尾嶼は尖閣久場島となり、距離百二十キロで實際と符合する。

その他細かな論點については我々の既發表の論文を讀んだ上で議論して欲しい。

〔いしゐ補記〕 臺灣北方島嶼の彭佳嶼から魚釣島まで現代値は約百三十九キロ。

【いしゐのぞむ】 東北大學藏『按針似看山譜』では、鷄籠の傍らに曰く、「東洋の山（島）を見れば、即ちこれ釣魚臺なり」と。臺灣島までは東洋でないと認識し、過ぎてから「東洋」海域となり、釣魚臺がある。附屬島嶼説を否定してゐる。これは孤立した史料ではない。チャイナの東

限が尖閣の遙か西方にあったことを示す史料は多數ある。

一方の琉球側の西限は、琉球風水にも見られる。冊封使汪楫が尖閣の東側で記録した「中外の界」は、琉球を中とする風水思想である。

第三回　平成二十六年十一月二十九日　浙江海洋學院

午前　【尾崎重義】　琉球王國の進貢船が福建に渡航した數は非常に壓倒的に多い。琉球大學の西里喜行の分析によれば二百年間で千隻の琉球船が渡航した。『歴代寶案』など琉球の公式の文獻に見える。チャイナ側の官船が琉球に渡航したのは四十隻ほどに過ぎなかった。

清國は琉球に渡航しても利潤が少ないため關心を失った。清國船はすべて長崎を目指した。琉球諸島を經由することはほとんど無い。

〔いしゐ補記〕　利潤の少なさが原因であることは、清國初期の郁永河や汪楫らの著作で言及される。

【尾崎重義】　琉球と薩摩との間には約千二百年前から色々な交流が有った。更に西暦十六世紀末にはそれが延長されて、薩摩、琉球、臺灣東岸を通ってマニラに行く航路となった。この航路は日本船も行ったしスペインの船も良く通った。

〔いしゐ補記〕　該航路は二十六聖人マルティノの遺言や、長崎の『寛文航海書』、『船乗ひらうと』などの書に見える。

【尾崎重義】　一方の清國船はあまり琉球を通らず、大陸沿岸から一氣に長崎に渡る。ポルトガル人がマカオから長崎に來る時も同航路だ。オランダ船がジャカルタから毎年進貢する際も尖閣は通らず、臺灣海峽の西寄りを大沿岸に進んでから長崎まで直進した。

〔いしゐ補記〕　オランダが臺灣島から撤退して以後の航路を指す。オランダには尖閣を正しく捕捉した地理書が無く、西暦十八世紀の蘭人コイレン（Ｋｅｕｌｅｎ）の琉球海域圖でも尖閣附近の島嶼は不分明である。

【尾崎重義】　西暦千六百年から明清交替に向かふ時期、澳門と呂宋との間から臺灣海峽、琉球、朝鮮にかけての海域は日本が制海權を握ってゐたと、リンスホーテンを始めとするオランダ史料にも書かれてゐる。

〔いしゐ補記〕　江戸時代初期、朱印状による貿易を指す。

【尾崎重義】　琉球人が頻繁に福建に渡航したことを示すのが、三種の航路圖である。それぞれ東洋文庫、沖縄縣立圖書館、久米島博物館に藏せられる。圖中に尖閣諸島が記載される。

〔いしゐ補記〕　第二回で尾崎が論及した「渡閩航路圖」。

【いしゐのぞむ】　第二回で高洪が『順風相送』の牽星術は釣魚嶼海域でも使用されてゐたと述べたが、そもそも牽星術（緯度計測術）はイスラム航海術である。元朝や明國・清國の技術ではない。『順風相送』は上下卷に分かれ、上卷はイスラム航法、下卷は釣魚嶼を載せる。

『順風相送』の近縁的史料『武備志』でも、明國から西へ進んでセイロン島でやっと牽星術の

記述が出現する。それより東では牽星記録が無い。『武備志』のチャイナ沿岸では牽星せず、尖閣海域も記載されない。

牽星術はインド洋のやうに東西方向で大洋を直航する際に最も有効だが、『順風相送』の尖閣東西航路では牽星記録が無い。チャイナは牽星術を有してゐなかったため、尖閣海域でもこれを用ゐないのは當然である。

第二回まで論及された三十六姓とはチャイナ人なのか琉球人なのか。まづ三十六姓は明國籍を離脱した記録が有る。且つ三十六姓は琉球國職員として琉球王命で水先案内をつとめるので、國籍は問題ではない。

〔いしゐ補記〕 明國籍離脱の記録は『皇明實録』西暦千五百四十七年十二月辛亥條に皇帝の認定語として見える。

【いしゐのぞむ】 國籍以外に民族も問題だ。現在チャイナ境内の民族分布を通觀すれば、西南・西北・東北には多數の少數民族が居住し、自治區が設けられてゐるが、東南にはほとんど存在しない。一方でチャイナ七大方言のうち六大までが東南に集中し、多様性が豐富である。これは東南各省の人々がもともと漢人でなく、自己の民族語で漢字を讀んでゐることを示す。古代では百越と呼ばれた。福建人も百越の子孫である。琉球へ移住した福建人は、明國籍を離脱した上に民族としても百越であるから、漢人としての成分は極めて少ない。

尖閣研究で廖大珂が多くの論文を書いてをり、歐洲製の尖閣地圖では臺灣と尖閣とが繫がってゐると主張してゐる。しかし臺灣が尖閣と繫がる時には必ず八重山諸島とともに繫がってをり、尖閣が單獨で臺灣に繫がった地圖は一つも存在しない。西暦千八百六十八年には尖閣と臺灣との間に界線を引く地圖（シュティーラー圖）も出現する。

午後 【修斌】 西暦千六百六年の夏子陽『使琉球録』に「黑を離れて滄に入れば、必ずこれ中國の界なり」と言ふ。滄は東支那海を指し、尖閣はその中に在る。

西暦千五百六十一年郭汝霖『石泉山房文集』に「琉球の境に涉る、界地は赤嶼と名づけらる」と言ふ。赤尾嶼がチャイナ琉球間の境界となってをり、境界を過ぎてからやっと琉球に這入り始める。

西暦千六百八十三年汪楫、西暦千七百五十六年周煌、西暦千七百六十四年潘相などはみな黑水溝を中外の界としてをり、チャイナ琉球間の境界線である。尖閣は黑水溝の西側に位置するのでチャイナに屬する。

チャイナ呂宋間貿易や長崎唐人貿易で分かる通り、チャイナの東側の海はチャイナ人が主に利用する海だった。そのため釣魚島の漢字發音もチャイナ人が發明した。

【侯毅】 西洋人の製作した地圖では尖閣だけでなく琉球をもチャイナと同色に塗ってゐた。

〔いしゐ補記〕 宣教師がチャイナ字音を歐洲に書き送ったのは、釣魚嶼のＴｉａｏｙｕｓｕだけでなく、琉球全土にわたってゐる。宣教師は入境できなかったためチャイナ字音を使った。逆に幕府の鎖國制度が琉球全土に貫徹してゐたことを示す。侯毅氏の發言も、逆に尖閣が單獨でチャイナの色に塗られたことが一度も無かったことを示す。詳細はいしゐ「チャイ

ナ尖閣特設サイトに反駁する」（平成二十七年『島嶼研究ジャーナル』第五巻第二號）參照。

夜間　【劉江永】西暦千九百五十年五月十五日に、建國からわづか半年の中華人民共和國内部では對日和約草案が出され、「釣魚諸島は琉球時代の領土に這入ってゐなかったので、臺灣に編入すべきか否か檢討を要する」とした。これは釣魚諸島がチャイナの領土だと知ってゐて主張したのである。

〔いしゐ補記〕　時事通信が二千十二年十二月二十七日に報じた内部文書である。日本側の一般的解釋は、「尖閣といふ日本名で認知しながら、外部へ主張しなかった」とする。

【劉江永】　西暦千三百七十三年・七十四年に明國水軍の張赫と呉禎が「琉球大洋」まで倭寇を追擊した。琉球大洋は琉球國に近い海域だ。

明國の鄭舜功『日本一鑑』には「釣魚嶼は小東の小嶼なり」と書いてあり、小東は臺灣を指すので釣魚島は臺灣に屬す。

西暦千八百八十五年、日本政府は秘密裏に釣魚島を調査する前に地圖を描き、「釣魚島」と書いてある。

〔いしゐ補記〕　大城永保の口述による地圖。史上「釣魚島」の初出である。それまでは釣魚嶼・釣魚嶼だけしか無かった。劉江永の趣旨はチャイナ名だとの前提にもとづく。

【いしゐ】　張赫と呉禎の遠征時は臺灣と琉球國とを區別できてゐなかった。現在は臺灣領有の根據としたい時にこの琉球大洋を臺灣だと主張し、釣魚島領有の根據としたい時に琉球大洋は釣魚島海域だと主張する。しかしこの時琉球大洋に出る前に經由した「牛山洋」は、今の福建沿岸の海壇島を指し、臺灣島北端よりも南寄りである。張赫と呉禎は臺灣島北端を越えたと書いてゐないので、この琉球大洋は臺灣海峽を指す。

【尾崎】　明國は臺灣を領土としてゐない。清國でも釣魚島を臺灣府の領土に入れた記述が存在しない。

【高洪】　尾崎・石井・劉江永の論文を同一の定期刊行物に發表できるのが理想だ。（チャイナの）刊行物には制限がかけられてゐるので、日本の學術界にこれを期待したい。

【劉江永】　琉球人の『指南廣義』には、牽星術を含む航海指南をチャイナ人が琉球人に傳へたと書いてある。

〔いしゐ補記〕誤り。『指南廣義』は牽星術を記載せず。

【劉江永】　西暦千八百十年の山田聯『地球輿地全圖』では臺灣及び釣魚諸島が緑色、琉球が赤色だ。島の形も釣魚諸島は三角、琉球はそれぞれ別の形だ。島名も釣魚諸島は上向き、琉球は逆さに書かれてゐる。

〔いしゐ補記〕色は明治大學藏の同圖を指すと思はれる。該圖ではチャイナと尖閣とマリアナ諸島などが同色である。三角は島形が不明のため山形で示した無主地的形象である。チャイナ沿岸の諸島嶼も山形となってゐない。上下逆向きの島名は薩摩・大隅・天草・種子島もある。該圖は朱印船航路圖にもとづき釣魚島と臺灣北方島嶼との緯度を明確に分けてゐる。

これは日本獨自の精確な情報である。

【疏震姬】　下關條約では、遼東に地圖を附し、澎湖諸島に經緯度を明記したが、臺灣及び附屬島嶼だけは範圍を明記せず、海圖・地圖で附屬島嶼は公認されてゐるので必要ないとした。そこには別の考慮があった筈だ。

〔いしゐ補記〕遼東には地圖を附しながらも附屬島嶼の範圍は明示されてゐない。臺灣でも北方島嶼などは清國臺灣府外であり、割讓の範圍を定めるのは難しい。それまでの國際的な公認の地圖海圖等が問題となるが、釣魚諸島を單獨で臺灣附屬とした地理書・地圖・海圖は一つも存在しない。いしゐ「尖閣獺祭録」（八重山日報、西暦二千十六年一月十四日至二千十七年一月十四日連載）參照。また疏女史説の詳細は疏震姬『釣魚島』（五洲傳播出版社、西暦二千十四年）參照。

第四回　平成二十八年二月二十五日　湘南國際村

【いしゐ】　發表の詳細資料を配布し、概要を口頭説明した。

明國清國の領土を海岸までとするのは、既知の官製地誌のみならず、蕭崇業『使琉球録』に「境上に候す」、夏子陽『使琉球録』に「境上に追送す」とあり、大陸海岸を指す。

大陸沿岸島嶼までを海防の限界とする史料も多い。『皇明實録』西暦一千六百十七年八月には、福建沿岸六島を指定して、六島の外は自由の海だとする。六島の一つ東湧は、釣魚島航路の西の入口である。同じ時期に長崎からの使者は東湧で「天朝の一草一粒をも犯さず」「大明の境界に入らざるなり」と述べたことが曹學佺『湘西紀行』、黄承玄『盟鷗堂集』に見える。西暦千六百八十三年、汪楫『觀海集』では東沙山（馬祖列島）までで福建が終ると述べる。西暦千七百三十年陳倫炯『海國聞見録』も、竿塘・東永（馬祖列島）を外側の海防線とする。

水先案内も同じである。清國徐葆光『中山傳信録』及び李鼎元『使琉球記』では馬祖列島から早くも琉球國職員が水先案内をする。最古の陳侃『使琉球録』では琉球國職員が「往來の海道」を案内すると決まって大喜びで福州から出航する。船中では漳州人の操船と琉球人の導航といふ分業があった。

明國の謝杰『琉球録撮要補遺』では、通常の操船は大陸沿岸の南北方向であり、海域ごとに地元の水先案内人を必要とし、國外（夷）では外國人が水先案内すると述べる。

清國汪楫『使琉球雜録』では、臺灣海峡で針路に迷った後に琉球人の針路に從ひ、その後で釣魚島航路を越え、水夫が「中外の界」に至ったと報ずる。この水夫は琉球人だと考へられる。

日本『寛文航海書』は長崎呂宋間航路を記述し、途中でトリシマ（釣魚諸島）を經るが、チャイナと全く關はらない。

前回修斌の論じた夏子陽『使琉球録』に「必ずこれ中國の界なり」といふ記録は、大陸沿岸島嶼を望見する前日であるから、沿岸で海色の變化した海域であり、尖閣よりも西側である。清國張學禮『使琉球記』の「中外の界」も尖閣の西側である。

清國齊鯤「東瀛百詠」では臺灣の基隆で「中華の界」を過ぎると述べる。ほぼ同じ海域で、徐

葆光『海舶三集』及び費錫章『一品集』は黒水溝の祭祀を記録し、「内外分界」などとする。琉球の程順則『指南廣義』でも鳥嶼（釣魚島）の西側海域を「流水甚だ緊なり」とする。現代科學に據れば臺灣北端と尖閣との間の大陸棚には黒潮が突入してをり、それを程順則は流水と呼び、清國人は中華の東限と看做したのだらう。

【段烽軍】　尖閣の西側の黒潮は八月以後の季節性のものだが、冊封使が東渡するのは陽暦六月なので、解として通じない。

〔いしゐ補記〕　段烽軍の重要な指摘にもとづき解釋すれば、そもそも黒水溝の祭祀は全て夜間に行なはれ、黒水溝そのものは歴代記録で一度も目撃されない。危險なので黒潮突入の季節よりも前に渡航し、ただ危險だといふ傳説にもとづき黒水溝の祭祀が行なはれてゐたと考へられる。

【いしゐ】　明國郭汝霖『石泉山房文集』で赤尾嶼を境界線とし、他史料でも久米島を境界線とするのは、全て琉球の西の境界線であり、チャイナの境界線は大陸沿岸及び臺灣北端に在る。

李鼎元「馬齒島歌」では福建沿岸の五虎門・竿塘と、久米島・慶良間とを東西の門戸とする。清國郁永河『裨海紀遊』でも五虎門を福建の門戸と呼ぶ。東西の門戸間に尖閣がある。

【李國強】　門戸は文化的形容に過ぎず、領土を示すものではない。東西門戸の中間の釣魚島を無主地とする論理は通じない。いしゐの主張のやうに釣魚島がチャイナの外ならば、歴史上で東支那海を活動の場とした大量の記録の説明がつかない。

【いしゐ】　東支那海が唐人の海だったことは認めて良いが、殘念ながらその中で唯一釣魚諸島だけは琉球人の文化圏だった。

黄叔璥『臺海使槎録』で大船十艘が釣魚臺に停泊できるとしたことを前回劉江永が論じた。しかしこれは臺灣東南部沿岸の三仙臺を指すと、西暦千九百三十八年に安倍明義が指摘し、後に簡後聰・鄭海麟・黎蝸藤・班偉らがその説に從ってゐる。

また高澄・尚貞・齊鯤・費錫章らは冊封使の釣魚島航路に停泊地は無いと述べてをり、汪楫・周煌がその説に從ってゐる。大船十艘の停泊地は尖閣ではなく別の釣魚島である。

鄭舜功『日本一鑑』、鄭若曾『籌海圖編』、全魁『乘槎集』、陳觀酉『含暉堂遺稿』、方濬頤「臺灣地勢番情紀略」などでは釣魚島を臺灣北方三島の一つと誤認してをり、尖閣の釣魚島ではない。最初に西洋式に釣魚島を今の尖閣と定めたのは、明治八年の「大清通商十五口圖」である。今のチャイナ側は全てこの日本側の定めた釣魚島を名稱として使ってゐるに過ぎない。

【劉江永】

「大清通商十五口圖」は、清國の「大清一統輿圖」にもとづくと明記されてゐる。日本が清國の情報にもとづいたのであり、いしゐの主張は逆だ。琉球三十六姓が水先案内をしたことは認めても良いが、彼らは福建人を祖先とするチャイナ人である。

西暦千八百七十四年『チャイナ・シー・ディレクトリー』第三冊では、臺灣とともに尖閣を記述する。附屬島嶼の證である。

明治二十三年『支那海水路誌』第一冊第五百六十四頁の經緯度表でも、釣魚島は臺灣北東諸島

として掲載される。

【川島眞】　英軍水路誌に載る釣魚島は水路を記述したに過ぎず、領土を示すものではない。

中華民國でも中華人民共和國でも、サンフランシスコ條約の前後に釣魚島領有を主張しなかった。しかし釣魚島の存在を認知してゐなかったわけではなく、兩者ともに内部文書では領有可能性を檢討してゐた。

西暦千九百七十年一月には中華民國經濟部の會議で尖閣諸島を釣魚臺列嶼と呼び換へることが提案された。基本的に經濟部は強硬派、外交部は融和派であったが、八月から釣魚島領有を求める聲が高まり、翌年中華民國は領有を主張し始めた。

〔いしゐ補記〕『支那海水路誌』經緯度表の標題は「臺灣島及び臺灣北東諸島」となってをり、表よりも前の正文では臺灣島部分に附屬の基隆嶼・龜山島等を載せて、東北諸島とは別扱ひにしてゐる。よって逆に東北諸島を附屬外とするのがこの經緯度表である。

明治二十七年『日本水路誌』では、序文に『支那海水路誌』と併せて刊行すると明記し、正文に釣魚諸島を載せる。領土を示すのでなく水路を示すので、中間の無主地釣魚島は日本誌とチャイナ誌との兩方に併載されたのである。

『チャイナ・シー・ディレクトリー』第三册も、第五百八十七頁で宮古八重山諸島及び琉球諸島を臺灣東北諸島として載せてをり、東北諸島と臺灣本島とは別である。同じく第四册の日本附近にも釣魚諸島は併載され、且つ第三百六十八頁經緯度表では宮古八重山諸島に入れられてゐる。

「大清一統輿圖」は、臺灣北方島嶼から尖閣諸島まで東西同緯度に列する。「大清通商十五口圖」は臺灣北方島嶼よりも高い緯度に釣魚島を置くので、釣魚島部分は「大清一統輿圖」にもとづいてゐない。臺灣北方島嶼よりも高い緯度に釣魚島を置くのは朱印船海圖から山田聯『地球輿地全圖』に承け繼がれた日本獨自情報であり、明治になって歐洲製地理書の緯度にもとづき少しく修正したに過ぎない。

【總論】

チャイナ側から提示された史料はほぼ全て既知のもので、西暦千九百七十一年伊澤眞伎の政治的な證言以外に新たな論點は一つも無かった。

日本側からは最新の研究成果が提示された。主には、釣魚島が和名から漢譯された可能性、史料の釣魚島の多くは別の島を指すか、乃至誤認したこと、尖閣の西方に歴代チャイナ國境線・海防線乃至文化的境界線が存在したこと、第二次大戦後も中華民國が釣魚島の存在を認知しながらも領有を主張しなかったこと、などである。

[2] 日本安全保障戰略研究所・專家觀點快訊二首

日本政府公布資料　琉球王親最早登陸　社科院研究員認為不是尖閣久場島

平成29（西元2017）年５月31日

日本政府内閣官房領土室五月十二日公布資料，內載西元1819年琉球王親登上「魚根久場島」，為現知最早登島紀錄，較之西元1845年八重山導航員引導英軍提督登島紀錄提早二十六年。

社會科學院近代史研究所臺灣史研究室副研究員李理在中國評論新聞網反駁說，魚根久場島是慶良間久場島，不是尖閣久場島。

李理研究員的說法在釣魚臺研究家鞠德源的著作中早就出現，三年前我已在論文中反駁過。道理很簡單，琉球王親登上的久場島無人、無水，隣近處沒有別島可呼救。而慶良間久場島與阿嘉島相隣，僅隔三公里，阿嘉島自古有人居住，可望見，可呼救。顯然不是琉球王親登上尋水的魚根久場島。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以下是社科院研究員李理原文。

中國評論新聞「中評關注：日本又撒彌天大謊來指鹿為馬」　2017-05-22

中評社香港５月22日電（作者 李理）

５月12日，日本政府公布了一份報告，其中包括約670份關於釣魚島（日本稱尖閣列島）及日韓爭議島嶼獨島（日本稱竹島）的“新史料”。日本稱這些史料“佐證了日本對相關島嶼擁有主權的合法性”。此次公布的關於釣魚島的史料中，包括清朝18世紀中期“未將釣魚島列入領土範圍”的官方地圖，以及琉球王族1819年登陸釣魚島群島中久場島（史載稱“魚根久場島”）的文字記述。日本政府利用民眾對史料的不了解，又開始了彌天大謊。

日本方面曾強高，釣魚島與琉球的關係，最早起始於1873年，證據資料為收錄於“勵志出版社”與“刀水書房”聯合出版的《釣魚台群島（尖閣諸島）問題研究資料匯編》中的《向琉球藩轄內久米島等五島頒發國旗及律令的文書》。

筆者在日本外交史料館找到其原件，其內容為日本明治政府在1872年10月單方面設立琉球藩後，於次年（1873年）3月6日，派外務省六等出仕伊地知貞馨，自行向琉球政府轄內久米島等五島，頒發日本國旗及律令書，其內容如下：

琉球藩：無奈海中孤島，境界尚有不明之處，難以預料外國卒取之虞。此次，授與你藩大國旗七面，自日出至日落，高懸於久米、宮古、石垣、入表、與那國五島官署。此次交付與你為新制國旗，日後破損以藩費修繕。

而琉球藩於同年（1873年）4月14日，向伊地知貞馨匯報：“懸掛於本職管轄內久米島及另外四島之國旗大旗一面、中旗六面，連同文書已順利交付完畢。”

從上份資料的內容分析來看，明治新政府要求琉球將日本國旗所懸掛之五島，為“久米、宮古、石垣、入表、與那國”，而這五島本為琉球之附屬，其中的所謂的“久米島”與“粟國島、慶良間島、渡名喜島”構成一個島群，本為琉球三十六島之一部分。

這裡的“久米島”就是此次日本公布資料中所謂的“久場島”（久場島位於慶良間群島的最西端，位於座間味島西南約七公里的海面上。其面積1.55平方公里，周長6.82公里。該島南北較長，呈四邊形，最高點"久場島之岳"，高270.1米，是慶良間群島最高峰。）本為琉球的領土。

筆者通過日本檔案了解到，“久米島”即日本所謂的“久場島”與“釣魚島”中的“久米赤島（赤尾嶼）”根本是兩個不同的島嶼。即使琉球王族真的於1819年登陸該島，也只是登上自己的所屬地，而不是中國的釣魚島群島中的久為赤島。以下日本檔案中所載地圖為證：

“久米赤島（赤尾嶼）”與“久米島”的距離，相差達七十多裡，故將此份資料，作為琉球擁有釣魚島的最初證據，完全是偷梁換柱，以普通人對歷史地理的不了解，混淆視聽來達到指鹿為馬之目的。

（作者系中國社會科學院近代史研究所台灣史研究室副研究員）

1819年琉球王親最早登陸　社科院研究員重新反駁：「1879年未劃入領土」

平成29（西元2017）年7月16日

日本政府內閣官房領土室五月十二日公布資料，內載西元1819年琉球王親登上「魚根久場島」，為現知最早登島紀錄，較之西元1845年八重山導航員引導英軍提督登島紀錄提早二十六年。

五月二十二日，社會科學院近代史研究所台灣史研究室副研究員李理在中國評論新聞網反駁說，魚根久場島是慶良間久場島，不是尖閣久場島。此說已被駁回，見日本安全保障戰略研究所五月三十一日專家觀點快訊。

六月二十日，社會科學院同一位研究員又反駁說，西元1879年日清談判島嶼時，日本未把釣魚列島包含在八重山群島之中。

很遺憾，此說仍然不構成任何異議。日本遲至西元1895年纔將之劃歸領土，西元1879年該列島還是無主地，地位未定，自然可以排除在八重山群島之外。西元1819年琉球王親登島，只顯示文化層面日本人進軍釣魚島的過程如此。相形之下，明國清國從未發現、命名、停泊、登陸、管轄、利用過釣魚列島。

現舉五條紀錄，說明明國清國一向不能停泊該島。西元1534年，冊封使高澄東渡琉球，往返海程都遇到風浪，回國寫一篇《操舟記》，記載了水手謝敦齊的一句簡括之語：「琉球去閩萬里，殊無止宿之地。」亦即釣魚台航線無處可泊船。謝敦齊是漳州人，在琉球人導航之下，第一次去琉球，此語蓋實錄也。後來清國各冊封使往往加以引述，從不反駁。

西元1683年，琉球國王尚貞上疏康熙皇帝，說冊封船隻離開福州沿岸小島之後，「中道絕無停泊之處」，徑直到達琉球，見琉球國《歷代寶案》。當時清國汪楫東渡琉球，途中目睹釣魚台，回國後寫《中山沿革志》，亦收錄此疏。汪楫是欽命冊封使，琉球國王多管閑事，說冊封使不能在釣魚台停泊，可是汪楫並不疑惑。

乾隆間冊封使周煌東渡琉球，也目睹釣魚台，後作《琉球國志略》，同樣收錄此疏，並無微辭。

嘉慶年間冊封使齊鯤、費錫章《續琉球國志略》云：「自閩出五虎門，至彼國姑米山，始有山可寄碇。」五虎門是福州河口的小島，姑米山是琉球久米島，意謂兩國中間的釣魚台無法停泊。這是冊封使親自寫的官方定論，不是琉球國王對天朝領土妄下論斷。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以下是社科院研究員李理原文

中國評論新聞網　中評專論　　2017-06-20 00:21:50

「釣魚島與歷史琉球國沒有任何關係」　中評社香港 6 月20日電（作者 李理）

5 月12日，日本政府公布了一份報告，其中包括約670份關於釣魚島（日本稱尖閣列島）及日韓爭議島嶼獨島（日本稱竹島）的“新史料”。日本稱這些史料“佐證了日本對相關島嶼擁有主權的合法性”。此次公布的關於釣魚島的史料中，包括清朝18世紀中期“未將釣魚島列入領土範圍”的官方地圖，以及琉球王族1819年登陸釣魚島群島中久場島（史載稱“魚根久場島”）的文字記述。日本政府利用民眾對史料的不了解，又開始了彌天大謊。

釣魚島在歷史上與琉球沒有任何關係。這在1879年日本的“分島案”中已經明確記載“宮古、八重山”的範疇不包括釣魚島。

1879年 3 月，日本完全不顧清政府駐日公使的抗議，單方面強行實施針對琉球的廢藩置縣。日本政府任命鬆田道之為處分官，率警部巡查160人，又由熊本鎮台撥步兵一隊隨行，27日，向琉球王尚泰宣布日本政府的廢藩置縣令，強行要求琉球“騰出首里城”，藩王赴京，“交付土地、人民及官簿等其他各類文件”。次年 9 月，日本政府公然在琉球實行新審判和警察制度，實施海外護照制度，凡琉球人到中國必須請發護照。日本完全控制了琉球的內政與外交，從制度上斷絕了與中國的藩屬關係。

琉球正式被日本吞並後，日本政府繞過意志堅定的何如璋，與北京政府直接交涉。李鴻章並不想因琉球而與日本失和並導致對立狀態，不主張對日興師問罪，恰值前美國總統格蘭特游歷亞洲中

日兩國，李鴻章等便請格蘭特調停琉球問題。

格蘭特接受了李鴻章、恭親王等要求其調停琉球問題的要求。到達日本後的格蘭特通過了解日本關於琉球問題的主張後提出“琉球三分案”，即將琉球中部的沖繩諸島，恢復琉球王國，南部的宮古、八重山群島，劃歸清國，北部的奄美群島，劃歸給日本。這個方案沒有得到日本的認可，在日本看來，北部的奄美島中的五個島嶼，實際上早就由薩摩藩統治，這樣的方案對日本來說沒有什麼益處，更沒有討論的價值。

在修約的壓力下，日本政府又向清政府提出了琉球的新處理方案，即所謂的“分島改約論”，其大體內容如下：清國若應我之請求，我政府為敦厚將來親睦，可以琉球接近清國地方之宮古島、八重山島二島屬於清國，以劃定兩國之異域，永遠杜絕疆界紛紜。

為了明確劃分區域，日本就“宮古、八重山”區劃進行了界定，其內容如圖所示：

（圖從略）

從以上檔案中所記載的其“宮古、八重山”的範圍，根本沒有釣魚島。故日本政府所謂釣魚島為“西南諸島”之說法，是無視歷史史實的謊言。那麼今天還公布史料說釣魚島屬於古琉球，完全是彌天大謊！

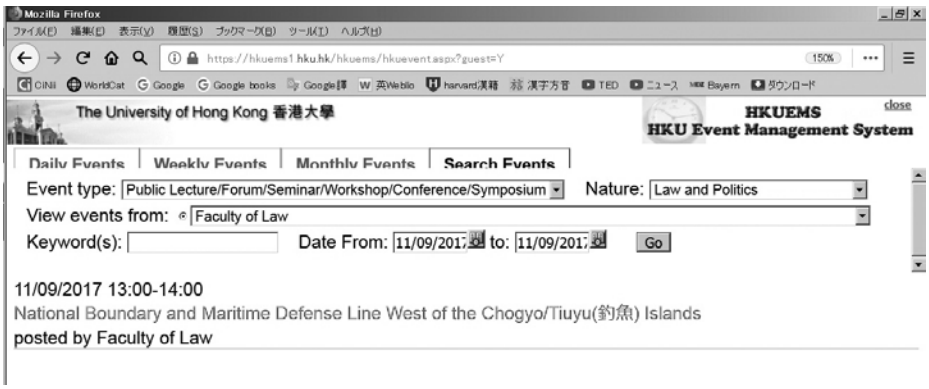
（作者系中國社會科學院近代史研究所台灣史研究室副研究員）

[3] National Boundary and Maritime Defense Line West of the Chogyo / Tiu yu（釣魚）Islands for Min & Shin（Mdr. Ming & Qing）Empires
（借問國疆何處有、牧童遙指釣臺西）

ISHIWI, Nozomu　（Nagasaki Junshin Catholic University）　　Handout for lecture
At room824, Centre for Comparative and Public Law, Hong Kong University, 13:00, 11-09-2017 (Heisei 29th)

いしゐのぞむ（石井望，長崎純心大學）　　演講發布資料

香港大學比較法與公法研究中心824室 平成29年（西元2017年）9 月11日13時



CCPL CENTRE FOR COMPARATIVE AND PUBLIC LAW
AT THE FACULTY OF LAW . THE UNIVERSITY OF HONG KONG

National Boundary and Maritime Defense Line West of the Chogyo/Tiuyu(釣魚) Islands for Min & Shin (Mdr. Ming & Qing) Empires
借問國疆何處有，牧童遙指釣臺西

Professor ISHIWI Nozomu (石井望、いしゐのぞむ)
Associate Professor, Nagasaki Junshin Catholic University

Monday, 11 September 2017, Lunchtime 13:00-14:00
Room 824, 8/F, Cheng Yu Tung Tower
Centennial Campus, The University of Hong Kong

Chinese records from the end of the 16th century defined the chain of islands off the Hokkien (Mdr. Fujian) coast including the Matsu, Wuku (Mdr. Wuqiu) and Penghu Islands, as the front line of coastal defence. The Senkaku/Diaoyu Islands route connects Ryukyu and Hokkien by a straight line east and west, with the Matsu Islands sitting at the western entrance. This puts the Senkaku/Diaoyu Islands far outside the limits of China's coastal defence line. The officially recognized territory of both the Min and Shin Empires extended only as far as the continental coastline, with the exception of the island territories of Kainan (Mdr. Hainan) and Taiwan prefecture. Officially speaking, all other islands fell outside Chinese territory. This would remain the status quo until the early years of the Republic of China.

西元十六世紀末開始，福建沿岸島鏈如東湧(馬祖列島)、烏丘、澎湖等，成為明清兩國海防前線。釣魚臺航線東西連接福建及琉球，其最西入口就是馬祖列島的東湧。釣魚臺遙遙位於明清海防界限之外。明清官修方志諸本一律規定其領土到大陸海岸為止，只有海南島及清國臺灣府是例外。其餘一切島嶼基本上都在國界之外。這個狀態一直延續到中華民國初年。

Professor Ishiwi is an Associate Professor at the Nagasaki Junshin Catholic University in Japan and a Special Researcher with the Cabinet Secretariat Commissioned Research Project on the Documents Relating to the Senkaku Islands. His works include: "Senkaku Refutation Manual 100", 2014, Shukousha Publication, 《尖閣反駁マニュアル百題》，集廣舍; "Three Discussions on Chogyosho/Tiuyutsui History, Handout material of The 4th Research Forum on The East China Sea Problem, The Tokyo Foundation & Institute of Japanese Studies in Chinese Academy of Social Sciences" 2016, 《釣魚嶼史三議》，東京財團、中華人民共和國社會科學院日本研究所，第四屆東シナ海問題研究會發布資料; and "The True History of Senkakus, China Can Not Refute", Sekihei (creator), ISHIWI Nozomu (supervise historical documents), Fusosha Publishing Inc., 2017（石平《中國が反論できない眞實の尖閣史》，いしゐのぞむ監修史料，扶桑社）.

Please click here for online registration to reserve a place.
For inquiries, please email Anna Lamut at alamut@hku.hk

ROC & PROC bases all of their Chogyo/Tiuyu Islands claims on having a certain level of control over them before 1895. We must therefore go back centuries in any debate about the islands, as limiting an examination to modern times will resolve nothing. We can not deny in this regard that historical documents were central to a legal dispute between the United Kingdom and France over the sovereignty of the English Channel islands (1951), albeit that the court dismissed all unclear documents. Hereinafter, I present aspects of the history of Chogyo/Tiuyu islands based on old documents regardless of whether or not they are valid under international law.

中華民國、中華人民共和國有關釣魚臺的主張，全然根據單一前提，即認為西元1895年以前明國清國已在釣魚臺上擁有某種控制力。我們因此必須上溯若干世紀，討論該島古史。倘僅限於討論現代事務，無助解決任何議題。在英法兩國間的英倫海峽群島案中，凡是不够明確的史料雖然被國際法廷駁回，但也不能否定史料曾成為爭論的焦點。這次演講，不管在國際法上有效無效，我將擧列主要史料來討論歷史。

Chapter 1　The Official Territory of Ming Empire　明國正規領土

Since the "Taai Ming Yat tung tsi" (Jp. Dai-min ittou shi, Official Records of the United Great Ming), which presents the Empire's geography till 1461, all Chinese geographic records have clearly stated that Chinese territory officially extends only to the east to the mainland coast and to the south to the southern tip of the Hoinaan (Jp. Kainan, Mdr. Hainan) Island. Records have also stated that Thoiwaan (Taiwan) Prefecture territory officially extends only to Fort

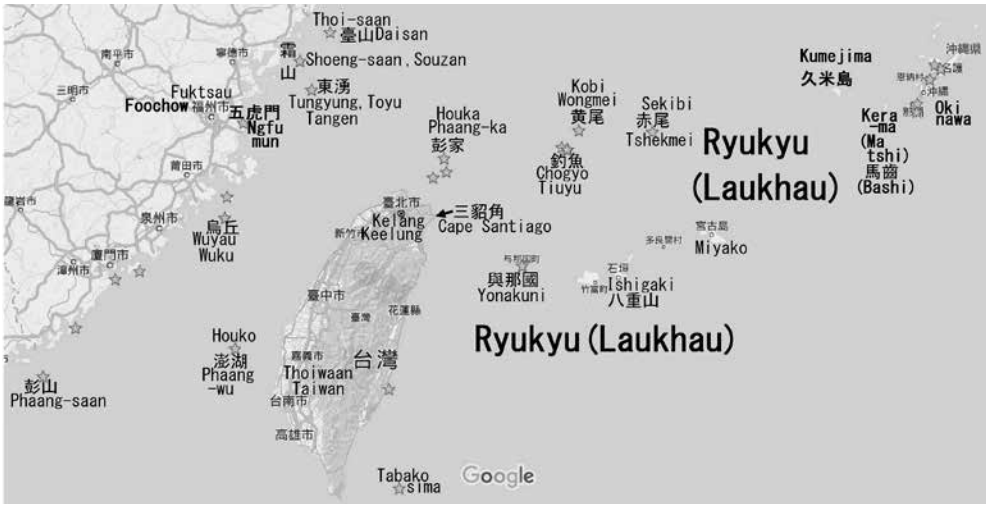


Figure 1　whole area

Keelung and Cape Santiago, or the north and north-east tips of Thoiwaan Island, respectively.

從西元1461年官修《大明一統志》開始，歷代方誌均記載正規領土東至大陸海岸，南至海南島最南界為止。臺灣府的正規領土亦以臺灣島最北界鷄籠城（今基隆）及東北界三貂角為止。

"Taai Ming Yat thung tsi", original texts as below.

Vol. 74: "(The area of) Fuktsau (Foochow) Prefecture is 190 Lei(Jp. Ri) east to the coastline, 250 Lei west to the border of Naamping County of Yinping Prefecture, 230 Lei south to the border of Phouthin County of Hingfa Prefecture, and 630 Lei north to the border of Pingyoeng County of Wantsau (mdr. Wenzhou) Prefecture, Tsitkong (Mdr. Zhejiang) Province."

卷七十四福州府：「東至海岸一百九十里。西至延平府・南平縣界二百五十里。南至興化府・莆田縣界二百三十里。北至浙江温州府・平陽縣界六百三十里。」

Vol. 75: "(The area of) Tshuen tsau (Mdr. Quanzhou) Province is 130 Lei east to the coastline, 150 Lei west to the border of Tshoeng-thaai County of Tsoengtsau (Mdr. Zhangzhou) Prefecture, 103 Lei south to the coastline, and 132 Lei north to the border of Sinyau County of Hingfa (Mdr. Xinghua) Prefecture."

卷七十五泉州府:「東至海岸一百三十里。西至漳州府･長泰縣界一百五十里。南至海岸一百三里。北至興化府・仙遊縣界一百三十二里。」

Numbers of "Lei" are usually written in the volume of "Koeng-wik"(疆域) (also "Fung-wik"(封域), "Fung-yu"(封隅) or "Koeng-kaai"(疆界) of geography books, and "Koeng", "Yu", and "Kaai" all mean boundary lines. While "Taai Ming Yat tung tsi" does not have a separate volume for "Koeng-wik" (territories), the numbers of "Lei" represent the boundary lines as well.

方誌通例，將里數記載在〈疆域〉卷（亦名封域、封隅･疆界等），疆、隅、界等字均指界線。《大明一統志》未立疆域卷，但同樣以里數代表界線。

There are many cases where the coastline was cleary specified as a border. For example, in the "General Chart" of "Loyuen Yuentsi" (Jp. "Ragen Kenshi", Records of Loyuen County), it stated that the north-east border was its "Taai Hoi Kaai" (border of ocean). see figure 2.

有些方志明確把界字用在海岸。例如西元1614年，福州府下《羅源縣志》卷首〈總圖〉以東北界線為「大海界」，見圖二。

Fig. 2 Loyuen Yuentsi, National Diet Library

Most territories in the Ming Empire ended at the coastline of the continent. However, Khing-tsau Prefecture or Hoinaam Island (Mdr. Hainan) of Canton Province was described as a Ming territory in Volume 82. Therefore, we can see that islands were not intentionally excluded in the book. It is important to note that Thoiwaan Prefecture of Fuk-kin (Mdr. Fujian) Province was included in the official geography book after the Tshing Empire invaded the west coast of Thoiwaan Island, but in the Ming Empire, Thoiwaan Island was not yet included in Fukkin province.

不止福建如此，基本上明國領土均截止於大陸海岸。唯獨廣東省瓊州府（海南島）屬於明國領土，遂在第82卷記載為界內之地。可知方志體例並不排除一切島嶼在外。我們不能忽略，清國因其侵奪臺灣島西岸，遂將福建省臺灣府增添在官修方誌中，但明國尚未包含臺灣島在福建省之內。

Capter 2　The Official Territory in the Island Thoiwaan（Taiwan）　臺灣島內正規領土

Successive territorial volumes of the Tshing imperial government journals clearly recorded that eastern end of Thoiwaan Prefecture was "the east up to Thoiwaan's Central Mountain Range". And during the late Tshing Empire, when Yilaan (Jp. Giran) in Thoiwaan's northeast was under Tshing rule, journals clearly stated that "the northeast is up to Cape Santiago."(See Figure 1) This is the northeast edge of Thoiwaan Prefecture. The Chogyo/Tiuyu Islands are

170 kilometers further northeast of Cape Santiago.

清國歷代方志領域卷都載明臺灣府東界為臺灣島中央山脈。直到晚清，侵奪東北部宜蘭入版圖，遂載明東北至三貂為界。三貂是臺灣島最東北邊的海角。釣魚臺從三貂向東北相隔170公里。

Year 1744, (Honghei era, Mdr. Kangxi) "Taai Tshing Yat tung tsi" (Mdr. "Da Qing yi tong zhi", The Imperial Geography of the Tshing Empire) original texts as below.

Volume 260: It states that the area of Fukkin (Mdr. Fujian) Province is 100 Lei (Jp. Ri, Mdr. Li) east to the ocean.

In the "Thoiwaan Prefecture Map", the borders at Keelung Fort and the Central Mountain are outlined. (See Fig. 3)

Volume 261: It states that (the area of) Fuktsau (Foochow) Prefecture is 190 Lei east to the ocean.

Volume 271: It states that (the area of) Thoiwaan Prefecture is 50 Lei east to the Central Mountain Range's border where indigenous people live …… 2,315 Lei north to the ocean behind the Keelung Fort.

It states that (the area of) Tsoengfa (Changhua) County is 20 Lei east to the Central Mountain Range's border where indigenous people live … 608 Lei north to the ocean behind Keelung Fort."

西元1744年，（康熙）《大清一統志》卷260福建省:「東至海、一百里。」又臺灣府圖:「鷄籠城界」、「大脚山界」（見圖３）。

卷261福州府：「東至大海、一百九十里。」

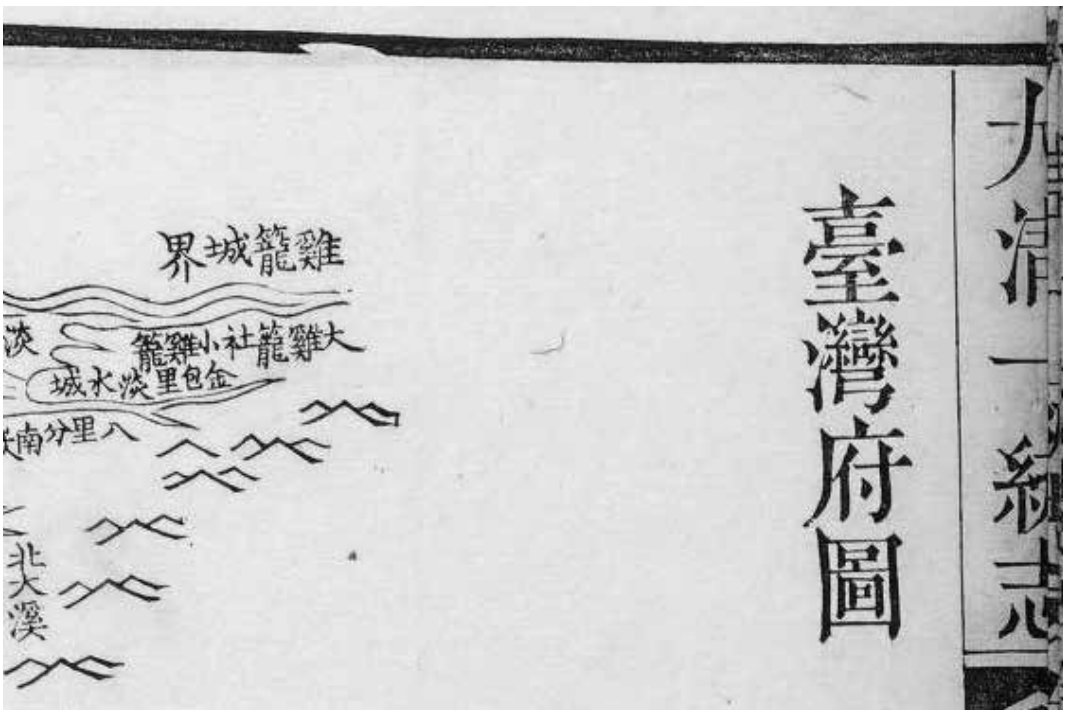
卷271臺灣府：「東至大山番界、五十里、…北至鷄籠城海、二千三百十五里。」

又彰化縣：「東至大山番界、二十里、…北至鷄籠城海、六百八里。」

Figure 3
"Taai Tshing Yat tung tsi"
volume 260
"Thoi waan Prefecture Map",
owned by Harvard Univ.
圖３　《大清一統志》
卷260〈臺灣府圖〉

As a rule, "to the ocean" (至海) and "to the coastline" (至海岸) have the same meaning. The "Sea of Kelan Fort" (Keelung Fort) signifies the coastline along the Keelung Fort.

方誌通例，「至海」與「至海岸」為同義。「鷄籠城海」指鷄籠寨的海岸。



Chapter3 Maritime Defense Line Before 1562

"Yin-hoi San-sa-thou" (Jp. "Enkai Sansazu", Coastal Islands and Reefs Map) in "Tshau-hoi Thou-pin" (Jp. "Chukai Zuhen", Mdr. "Chouhai-tubian", Book of Maritime Strategy Illustrations) of 1562 is a well-known basis of China's claim to the Chogyo / Tiuyu (Senkaku) Islands (see Figure 4). The Senkakus (Cantonese: Tsimkok) appear in the top corner of the map. However, one ought to divide the top and bottom halves of the map with a straight line. The bottom half contains arrangements of defense bases. The top half only shows islands. The bottom half basically matches the volume 4 titled "Bingfong Gun Haau" (Jp. Heibou kwankou, Description of Defense Bases), which lists all Fukkin (Mdr. Fujian) defense bases. It shows that the top half arranges only terra nullius islands outside maritime defenses. This was when Wokhau (Jp. Wakou, so called Japanese piracy) was peaking in the East China Sea, with Ming Empire military forces desperately defending the coast. That is what this map shows.

作為中華民國中華人民共和國的論據，西元1562年《籌海圖編》中的〈沿海山沙圖〉非常著名（圖

４）圖的最上一頭附近繪有尖閣諸島。可我們只要把圖用直線分為上下就好。下半舉列海防根據地，上半只畫眾多島嶼。同書中的卷四〈福建兵防官考〉所列福建防地，和圖的下半所列防地略相一致。可知上半都是海防線外的無主島嶼。此書的年代是福建倭寇（東支那海海盜）鼎盛期，明國兵力只能死守海岸線。這就是此圖所表達的本意。

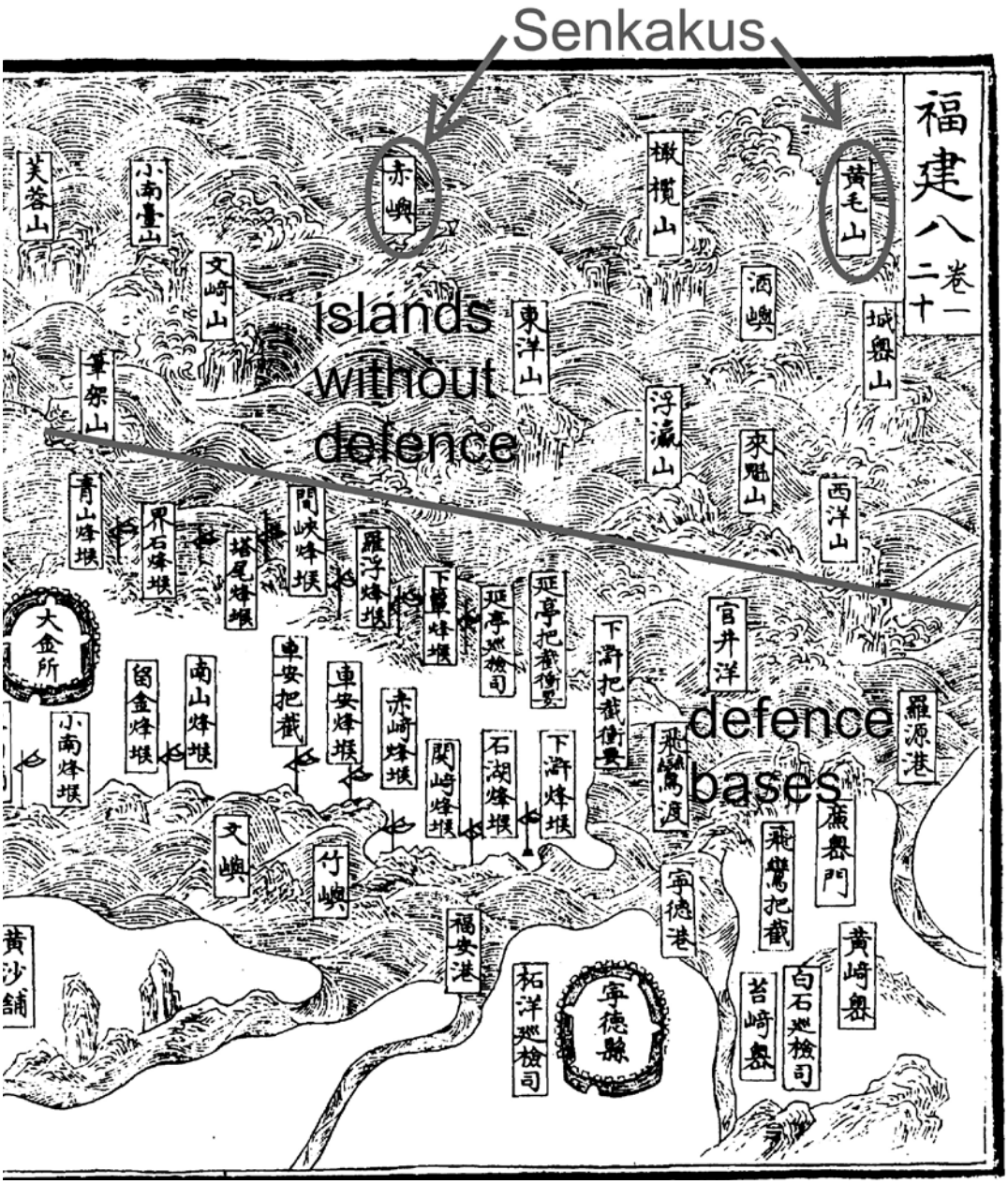


Figure 4　The Fuk-kin (Jp. Fukken, Mdr. Fujian) 8th part of "Yin hoi Saan Sa Thou" from "Tshauhoi Thoupin", "Seifu Tshuenshu" version (Mdr. "Siku Quanshu", Complete Imperial Library in Four Sections)　圖４《籌海圖編》內〈沿海山沙圖〉，《四庫全書》本

Chapter 4 Maritime Defence Line After 1562, "The Zeroth Island Chain"

Wokhau piracy (literally refer to Japanese pirates) plunged from 1563, and there was a surge in records stating that the Fukken navy pursued the pirates to the most distant coastal islands, such as Matsou (Jp. Baso, Mdr. Matsu) islands and Phangwu (Jp. Houko, Mdr. Penghu) islands.

Later on 1592, Tsiu Tshaam-lou, who is Tshoen-fu (Military Director General) of Fuk-kin province, released "Yu-shuen Kam-yoek" (prohibition against fishing boats, see Figure 5 & 6):

> "Thoi-saan and Shoeng-saan in Fung-fo area, Tung-yung in Siu-tshing area, Phaang-wu and Liu-lo in Ng-tsui area, Tung-wu and Wu-yau in Naam-yat area, Sa-tsau in Thung Saan area, and so on, these important sea areas are all far out of the islands, where the barbarians inevitably pass through."

從西元1563年開始，倭寇劇減，而福建水軍將之追擊到沿岸最遠島嶼（馬祖列島、澎湖諸島等）的紀錄隨之劇增。

後來西元1592年，福建巡撫趙參魯發布「漁船禁約」（見圖５及６）：

> 「如烽火之臺山礪山、小埕之東湧、浯嶼之彭湖料羅、南日之東滬烏坵、銅山之沙洲、諸如此類緊要海洋、皆孤懸島外、為夷寇必由之地。」

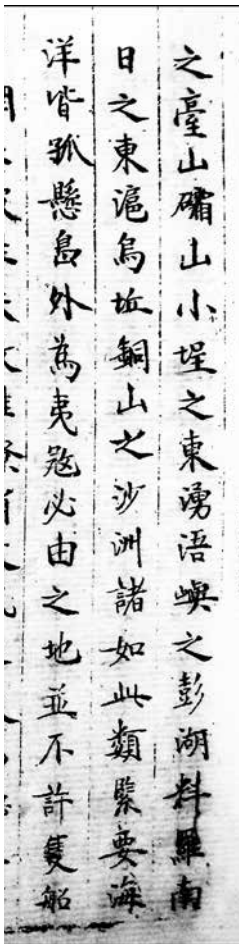


Figure 5
"Yu Shuen Kam Yoek"　from "Yuen Laam Thong Tshung Shu" book 16
圖５　「漁船禁約」『玄覽堂叢書續集』第16冊

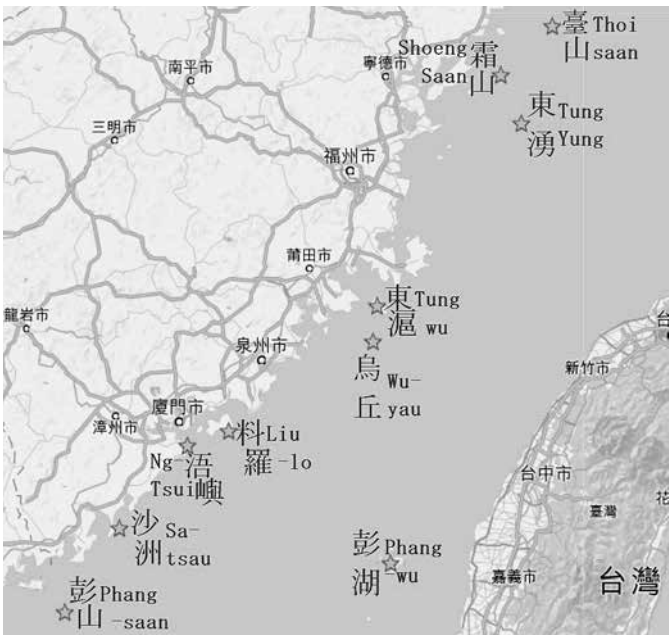


Figure 6 google

In 1594, "Tshau-hoi Tshung-pin" (Jp. "Chukai Chouhen") by Tang Tsung (Jp. Toushou), a revised version of Tshau-hoi Thou-pin, records a defense line connecting the six furthermost islands from north to south of the Fukkin coastal area.

西元1594年，鄧鐘修訂《籌海圖編》為《籌海重編》，紀錄到福建沿岸最遠島嶼防線，從南到北，連結六島。

The volume 4 "Tsaai Yau Yiuhoi" (Strategic Points Named Tsaai and Yau) says:

"Thoi-saan in Fung-fo area, Tung-yung in Siu-tshing area, Tung-tshoeng in Hoi-thaan area, Wu-yau in Naam-yat area, Phaang-wu in Ng & Thung area, Phaang-saan in Yuen-tsung area, these all are the places where the Wo-khau (Japanese barbarians) inevitably pass through."

卷四「寨遊要害」云：「烽火之臺山・小埕之東湧・海壇東庠・南日烏坵・浯銅彭湖・玄鍾彭山、皆倭寇必經之地。」

In the volume 1 "Maan-lei Hoi-thou" (Jp.Banri Kaizu, Ten-Thousand Chinese Mile Nautical Chart, Figure 7), there are the furthermost islands too, which are noted as below.

Wu-yau (Wuku): "This is an overseas island, many Japanese ships pass through here."

Tung-yung (Tang-en, Jp.Toyu): "This is an overseas strategic place, many Japanese ships pass through here. "

Shoeng-saan: "These are strategic places in the sea, many Japanese ships pass through here when they come and go."

Thoi-saan: "This is an strategic place in the sea, many Japanese ships pass through here. "

卷一「萬里海圖」也排列最遠島嶼，島側各註如下（見圖７）。

烏坵：「此海外山，倭舡多由此過。」（舡同船）

東湧：「此海外要地，倭舡多由此過。」

霜山：「此海上要地，倭舡來往多由此過。」

臺山：「此海中要地，倭船多由此經過。」

The defense line had advanced, instead of receding. The said Japanese ships in this era, refer to the Red Seal Ships (Shuinsen, which hold licences of Toyotomi Hideyoshi or Tokugawa Shogunate). This record indicates the Fukkin (Mdr. Fujian) defence line was equal to the conventional route of the Red Seal Ships.

福建防線並非後退，而是前進。所謂倭船，在這個年代泛指朱印船（豐臣秀吉及德川幕府交付執照的船隻）。可見福建海防線正等於朱印船的常規航線。

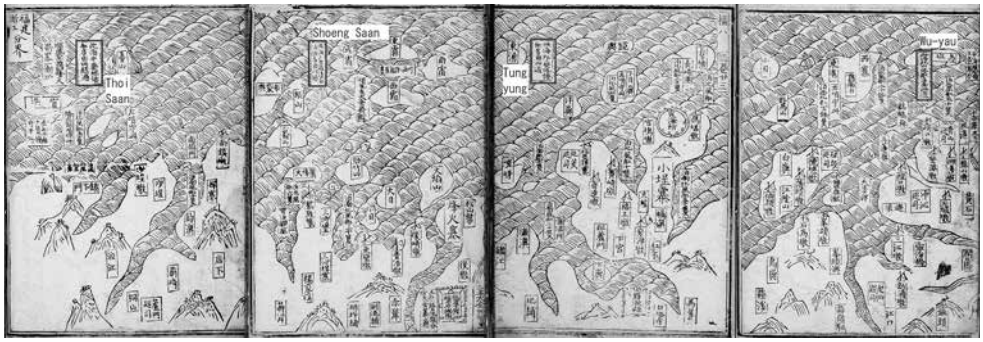


Figure 7　"Maan-lei Hoi-thou" in "Tshau Hoi Tshung-pin", the four furthermost islands, from Tenri University Collection.
圖 7　『籌海重編』卷一「萬里海圖」，最遠四島。天理大學藏刊本。

Enlarge on below

In the Japanese documents and maps, there also appear Tungyung, Wu-yau, Phaang-wu, Phaang-saan as the route of the Red Seal Ships. See Figure 8 & 9.

日本史料及海圖也出現東湧、烏丘、澎湖、彭山 (南澳彭) 作為朱印船航線。見圖 8 及 9 。

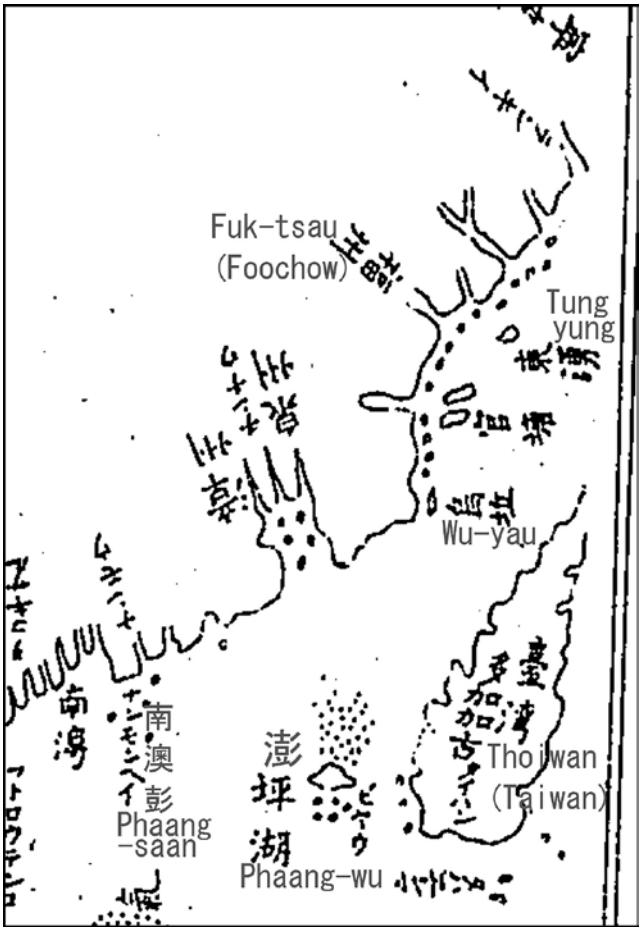


Fig. 8
Appendix map of
"Amako Kiryakko"
(The Brief Tentative Description of Macau)
by Kondo Juzo,
owned by
National Diet Library Japan
圖 8
近藤重藏《亞媽港紀略稿》附圖，國會圖書館藏。

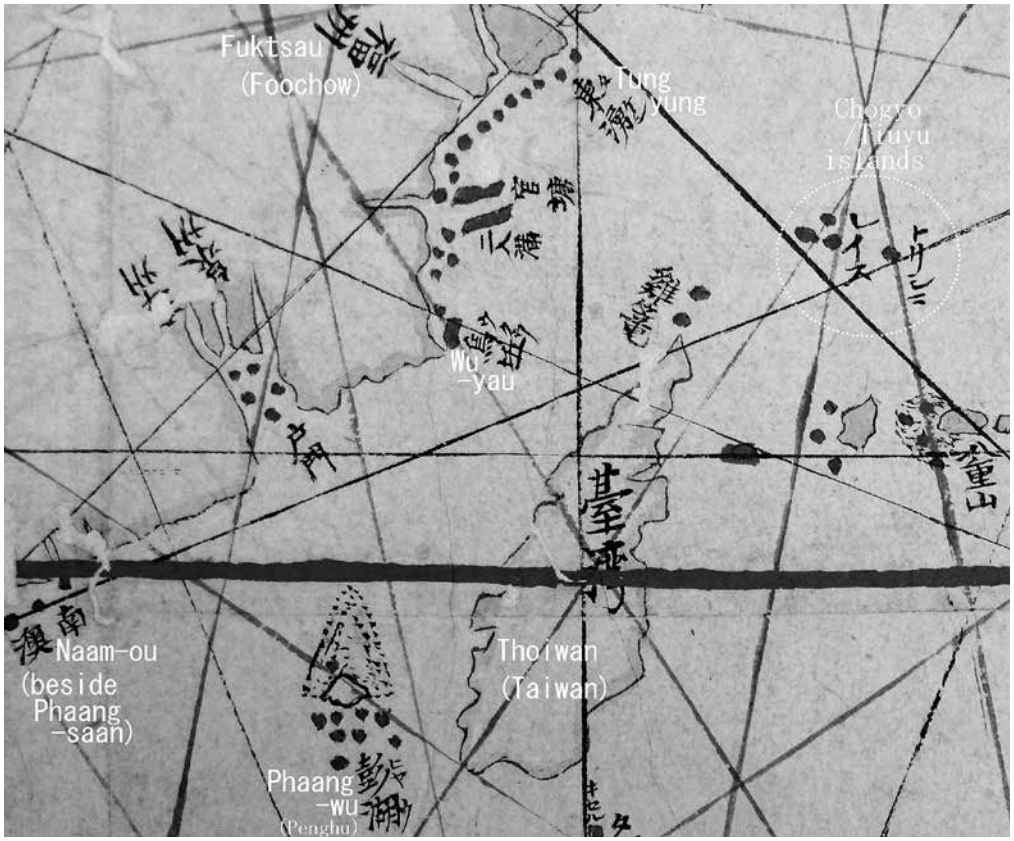


Figure 9 "Toyo Nan-yo Koukai Kozu" (Old Sailing Map of East & South Sea), signed by Ro Koro.
From the collection of Nagasaki Museum of History and Culture.
圖 9　署名盧高朗，〈東洋南洋航海古圖〉，縣書3-62-1，長崎歷史文化博物館藏

The subsequent historical documents clearly stated that Fukkin (Mdr. Fujian) coastal defenses reached up to six islands (or inside the six islands) from Fukkin's south through north tips on the mainland coast. The documents included:

1592, "Yu-shuen Kam-yoek" by Tsiu Tshaam-lou. (detailed above)

1594, "Tshau-hoi-Tshung-pin" by Tang Tsung (Mdr. Deng Zhong) . (detailed above)

1595, "Khin-thoi Wo-tsuen" by Tse Kit, volume 1 "Wo-fong" no. 2, "Maan-lei Hoi-thou".

1599, "Tang-thaan Bit-kau", by Wong Ming-hok, volume10, folio 60 "Tsaai Yau Yiuhoi"

1613, "Hoi-fong Tsuen-yiu" by Wong Tsoi-tsoen, volume 1 "Fok-kin Affairs, Strategic Points Named Tsaai and Yau".

1617, "Wong Ming Sat Luk" (Mdr. Huangming Shilu, The Official Annals of Ming Empire). (to be detailed below)

1630, "Wang-ming Sai-faat-luk" by Tshan Yan-sek, volume 75 "Hoi-fong, Man-hoi".

1730, "Hoi-kwok Kin-man-luk" (Mdr. Haiguo Jianwenlu, Notes on Lands Across the Sea), by Tshan Loen-kwing.

Espetially, one of the six islands, Tung-yung (or Tang-en, Jp. Toyu, today one of Matsou Islands) is the western entrance to the Chogyo / Tiuyu Islands shipping route and is only 40 kilometers from the mainland of China. The Chogyo / Tiuyu Islands, further east from Tung-yung were outside the maritime defense line. (See figure 12)

後來歷代史料寫明福建海防只到達大陸沿岸六島（或六島內側），自福建北界到福建南界。略如：

西元1592年趙參魯『漁船禁約』（已詳上）

西元1594年鄧鐘『籌海重編』卷一及卷四（已詳上）。

西元1595年謝杰『虔臺倭纂』上卷「倭防二・萬里海圖」

西元1599年王鳴鶴『登壇必究』卷十第六十葉「寨遊要害」

西元1613年王在晉『海防纂要』卷一「福建事宜・寨遊要害」

西元1617年官修『皇明實錄』（詳下）

西元1630年陳仁錫『皇明世法錄』卷七十五「海防・閩海」。

西元1730年陳倫炯『海國聞見錄』卷上「沿海全圖」

尤其六島之一東湧島（今馬祖列島最東）是釣魚臺航線最西入口，離大陸也不過40公里。釣魚臺在東湧之東遙遠處，自屬海防線外（圖12）。

The maritime defense line was basically fixed on the certain location in subsequent historical materials. In particular in the article of 1617 of "Wong Ming Sat-luk" (Mdr. Huangming shilu), Hon Tsungyung, the Prosecutor General of the Admiralty Board of Fukkin, notified Akashi Doyu, a Japanese envoy, of the maritime defense line of six islands (see Figure 10, and Yomiuri Shimbun article, 23-01-2013). One of six was Tung-yung Island, currently the east end of the Matsou (Jp. Baso, Mdr. Matsu) Islands as the west entrance to the Chogyo / Tiuyu shipping route, with all ships voyaging to Ryukyu passing through the seas around Tung-yung. The Chogyo / Tiuyu islands were well outside the maritime defensive range, which only went as far as Tung-yung.

從此歷代史料中，海防前線大致固定。尤其在官修《皇明實錄》西元1617年八月條，福建海防長官韓仲雍對日本使節明石道友宣告六島為海防線（見圖３及《讀賣新聞》西元2013年１月21日晚刊消息）。六島之一東湧島（今馬祖列島東界東引島）為釣魚臺航線的最西入口，凡是東渡琉球的船隻都會經過東湧附近。既然海防線至東湧為止，可知釣魚臺遠在海防線外。

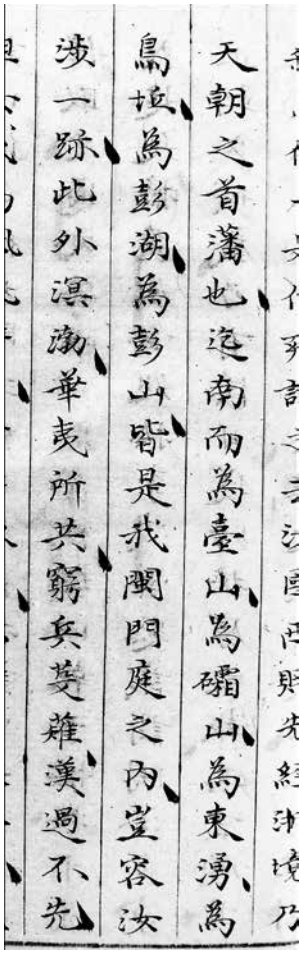

天朝之首藩也迤南而為臺山為礮山為東湧為
烏坵為彭湖為彭山皆是我閩門庭之内豈容汝
涉一跡此外溟渤華夷所共窮兵戈雖漢過不先

Figure 10　Wong Ming Sat Luk (Jp. Koumin Jitsuroku), August 1617:
"Thoisaan, Soengsaan, Tung-yung, Wuyau, Phaang-wu, Phaang-saan (Jp. Daisan, Souzan, Toyu, Ukyu, Houko, Houzan), these islands are inside our Fukkin (Mdr. Fujian) gate area. .....the ocean beyond the islands was free for China and any other nation to navigate....."
manuscript owned by the National Archives of Japan
圖10　官修《皇明實錄》萬曆四十五年（西曆千六百十七年）八月，日本國立公文書館藏寫本。
「臺山、礮山、東湧、烏坵、澎湖、彭山，皆是我閩門庭之内，……此外溟渤，華夷所共。……」

Reference : Chinese document contradicts Beijing's claim to Senkakus
The Yomiuri Shimbun newspaper　Date : 23-01-2013　English version

A document from the early 17th century shows that China did not control the Senkaku Islands, contradicting Beijing's more recent claims and underlining Japan's insistence that they are an inherent part of this country's territory, according to a Japanese researcher.

During China's Ming dynasty, a provincial governor told a Japanese envoy that the ocean area under the dynasty's control ended with the Matsu Islands, now under Taiwan's administration, and the sea beyond that was free for any nation to navigate, said Nozomu Ishii, an associate professor of Nagasaki Junshin Catholic University.

The Matsu Islands are much closer to China than the Senkaku Islands, which China claims to have controlled since the Ming dynasty about 600 years ago.

At a press conference Monday, Ishii said the Chinese governor's statement appears in "Huangming Shilu", the official annals of the Ming dynasty.

"This historical material proves that Japan's claim over Senkaku Islands is historically correct," he said.

"Huangming Shilu" comprise the records of the activities of Chinese emperors, addresses the throne and others. Transcriptions of the records can be found in the National Archives of Japan.

Ishii found a record in the annals dating from August 1617, which describes the arrest and interrogation of Akashi Doyu, a Japanese envoy from Nagasaki, by the head of the Chinese coast guard. The description was in the form of an address to the throne.

According to the record, the governor met the envoy and mentioned the names of islands, including one on the eastern edge of the Matsu Islands, about 40 kilometres off the Chinese mainland, that was controlled by the Ming and said the ocean beyond the islands was free for China and any other nation to navigate. The Senkaku Islands, including Uotsurijima island, are about 330 kilometres from the Chinese coast.

However, China says the border of the Ryukyu kingdom, present-day Okinawa Prefecture, lay between Kumejima island, east of the Senkaku Islands, and Taishoto island, one of the Senkakus, so Uotsurijima island and the other islands belonged to Ming-dynasty China.

Ishii says the record he found proved the Ming controlled the ocean within 40 kilometres from the mainland and the Senkaku Islands belonged to no nation. The Japanese government says the islands were put under its jurisdiction in 1895 after confirming that no nation had claimed them.

Shigeyoshi Ozaki, emeritus professor of the University of Tsukuba and an expert in international law, said: "We know the Ming had effective control only of the coastal area from other historical sources. What is remarkable about this finding is that a Chinese official made a clear statement along these lines to a Japanese envoy. This proves the Senkaku Islands were not controlled by the Ming."

Figure from Yomiuri Shimbun newspaper, English version, 23rd January 2013

《讀賣新聞》西元2013年１月21日晚刊第12版

〈尖閣400年前、明の支配域外、皇明實錄に記載〉

中國明王朝官方日誌《皇明實錄》中，有記載說到：明國地方長官與日本使者之間，明言明國所支配海域只到臺灣馬祖列島為止，該島位於尖閣諸島（沖繩縣）之中國一側，其外側海面可自由航行。長崎純心大學石井望准教授（漢文學）發現此記載，二十一日上午在長崎市內會見記者，公布消息。

中國目前主張自六百年前明國時代開始，一直支配尖閣諸島。石井氏會見記者時談到：「從歷史觀點看，圍繞尖閣的爭論還是以日本一方的主張為正，可據該件史料知道。」

石井氏尋到的是江戶時期初葉，1617年８月《皇明實錄》的記載，防守沿岸地區的長官「海道副使」（海防監察長官）逮捕糾問長崎使者明石道友。在上奏皇帝的奏疏中收錄此記載。

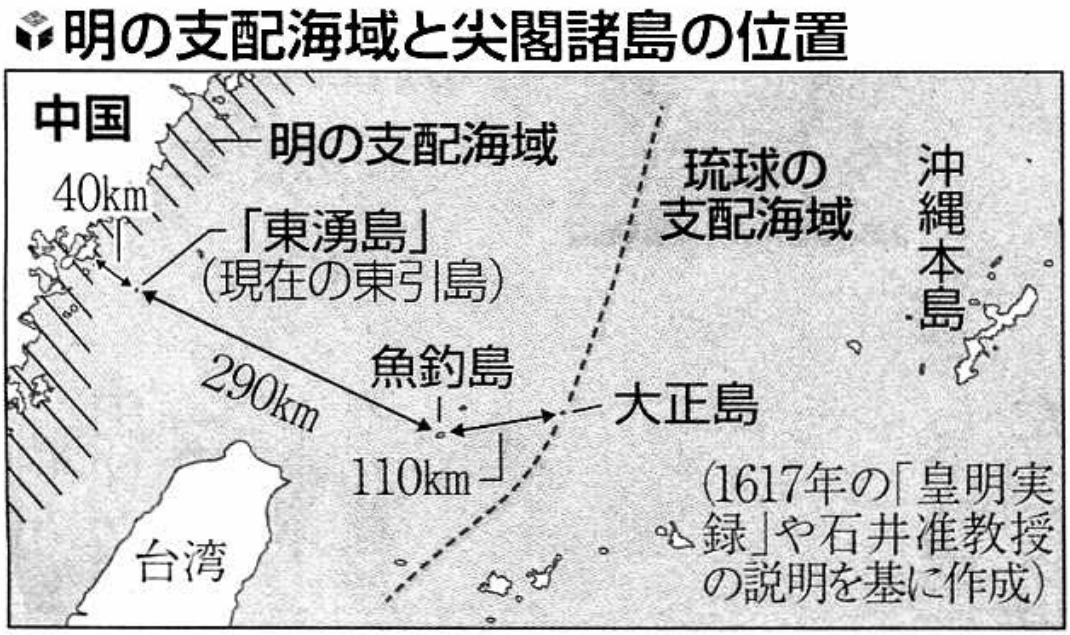
據此條記載，該海道副使對明石列擧沿岸約四十公里處的「東湧島」（今馬祖列島東界東引島）等各島嶼，指明由此而外的海洋是「華夷所共」，為中國及他國所自由使用。尖閣諸島由魚釣島等各島組成，離中國大陸約有三百三十公里。

中國根據明王朝1530年代派遣使者東渡琉球的紀錄，主張琉球所支配海域的邊界線位於尖閣諸島東側久米島和該諸島中的大正島之間，魚釣島等均為明國領土。但石井氏指出，據今次發現的記載可知，明國所支配海域從沿岸約四十公里為止，尖閣諸島不屬於任何一國，向為「無主地」。日本政府稱，曾調查確定尖閣諸島為「無主地」，於1895年編入日本。

筑波大學尾崎重義榮休教授（國際法）詳悉尖閣問題，對此評估認為：「根據其他資料，一向知道明國支配領域並不到達臺灣，只停留在大陸沿岸。今次發見的新穎之處在於，中國方面把這種認知明告日本使者，可以說提出了該國支配不及於尖閣的證據。」

（讀賣新聞，石井望譯）

讀賣新聞西元2013年1月21日晚刊內圖



Capter 5 Islands Limit Line After 17th Century

Many travel journals and maritime defense records have since stated that Matsou islands were the eastern end of China. Accounts by accredited Chinese envoys traveling to Ryukyu can serve as circumstantial evidence, including their poetry.

此後歷代頗多海防紀錄及游記等，以馬祖列島為明清極東界限。尤其冊封使節東渡琉球的記載，就連詩歌，也可以作間接證據。

As stated in the title of a poem, written by Wong Tsip (Jp. Oushu, Mdr. Wang Ji) in June 1683, in his collection "Kun Hoi Tsaap" (Jp. Kwankaishu, Mdr. Guan hai ji, The Collection of Maritime Observations) :

> "Once past Tungsa Saan (Jp. Tousasan, Mdr. Dongshashan), the territory of Mansaan (Jp. Binzan, Mdr. Minshan) comes to an end."

西元1683年6月，汪楫詩集《觀海集》中詩題云：

> 「過東沙山，是閩山盡處。」

Man Saan refers to the lands of Fukkin (Fujian) province, involving islands in them, and Tungsa Saan corresponds to one of the Matsou Islands. Wong Tsip's eastern voyage took place precisely at the time of battles around the Phaang-wu (Pescadores, Penghu) waters. At that time, therefore, Thoiwaan was not yet annexed as a part the Tshing Empire territory, and it

was also not possible to set up a new province there. At the time, Thoiwaan was still outside Tshing territory. The edge of Fukkin was same to the edge of Tshing Empire. Beyond Fukkin province were only tributary states and terra nullius. That's exactly why Tshing Empire's eastern borders on the sea route understood by Wong Tsip, correspond with Tungsa Saan, northwest of Thoiwaan. The Chogyo / Tiuyu Islands are far out of Tshing territory.

閩山是指福建省陸地，包括島嶼在内。東沙山為今馬祖列島中一島。汪楫東渡，恰逢澎湖海戰，臺灣島未被吞併為領土，更未設省。此時臺灣尚在清國外，福建之盡，等於清國之盡。福建省既然盡了，界外只有冊封國及無主地。所以汪楫所認知航線中的清國東界，是臺灣島西北側的東沙山，釣魚島遙在清國領土之外。

In 1800, Lei Tingyuen (Jp. Ri Teigen, Mdr. Li Dingyuan) composed "Bashito-ka" (Cantonese Matshi-tou-Ko, a poem about the Kerama islands, volume 14 of "Si-tsuk-tsaai-taap"). One line stated that,

"Bashi Island, the gateway to the 36 islands, is very much like Kunthong (Jp. Kwanto, Mdr. Gantang) and Ng-fu-mun, (Jp. Goko-mon, Mdr. Wuhu-men)."

The 36 islands were rough total number belong to Ryukyu. Kunthong was one of Matsou islands. Ng-fu-mun was an island in the Man (Mdr. Min) River mouth in Fukkin. The poem indicates rarely at the same time that Kume and Kerama islands area was considered as the western edge of Ryukyu and Matsou and Ng-fu-mun area as the Tshing Empire's eastern edge.

西元1800年，李鼎元《師竹齋集》卷14〈馬齒島歌〉中有一聯云：

「三十六島此門戸，絶類竿塘石虎五。」

馬齒島即慶良間諸島，三十六島是琉球國全島概數。竿塘為馬祖列島之一。五虎門位於福州河口。絶類謂極似。此詩顯示久米島、慶良間島附近為琉球西界口，馬祖列島及五虎門附近為清國東界口，一語道破。

However, Phaang-wu (Pescadores) islands differ within the six island line. In the winter of 1683, the Tshing army advanced from Phaang-wu, invaded the west coast of Thoiwaan Island, and built an administrative district of Tshing Empire called the Thoiwaan Prefecture. For 200 years thereafter, Thoiwaan Prefecture was up to Keelung in the north. Successive imperial government journals clearly record it as thus. Such documents include "Taai-Tshing Yat tung tsi", and "Taamsui Thingtsi" (Mdr. Danshui tingzhi, the Taamsui Subcounty Topology). The records are similar to the national border in the southern end of Hoinaan (Mdr. Hainan) Island being stabilized for 500 years. The Senkakus were positioned outside the national border, as they were further north than Keelung.

雖然如此，但在六島線中，唯獨南方澎湖諸島異於他島。西元1683年清國從澎湖進軍，侵奪臺

灣島西岸，建立新的清國行政區劃，名為臺灣府。臺灣府北至鷄籠（今基隆）為領域，從此固定了二百年。歷代官修方誌有案可稽，如《大清一統志》、《淡水廳志》等不勝煩舉。這種情形，恰與海南島南端的國界線從十五世紀固定五百年相似。釣魚臺較基隆更北，遙遙位於國界線外。

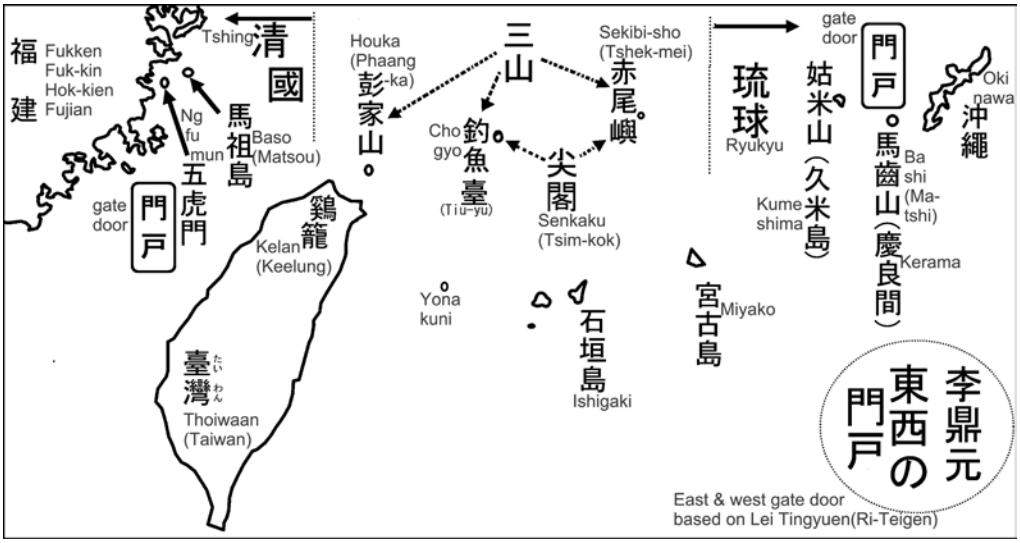


Figure 11　　圖11

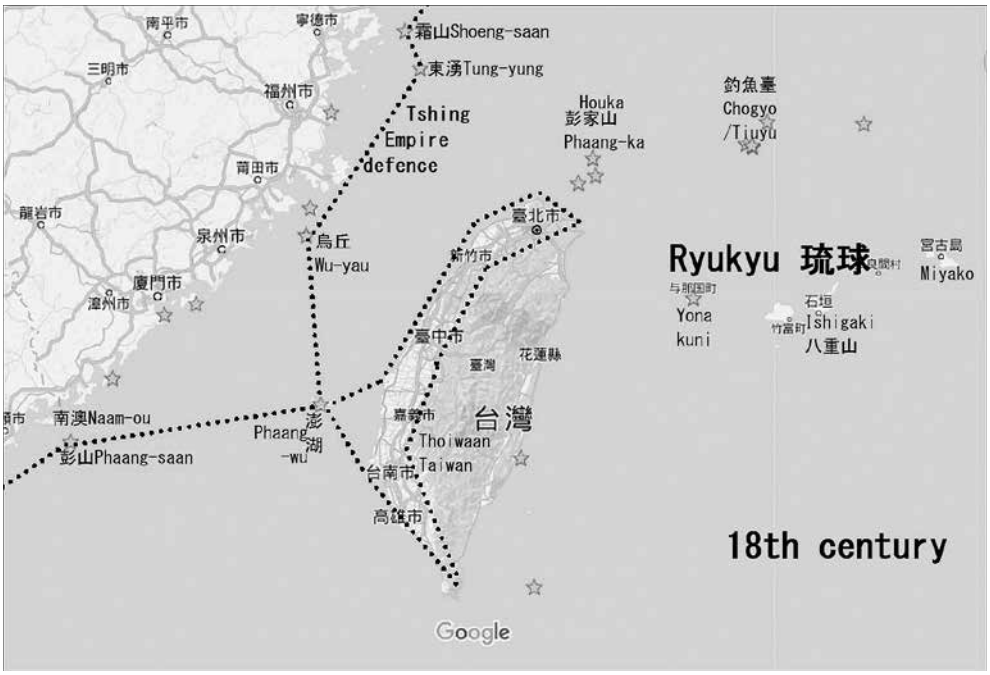


Figure 12　　圖12

Chapter 6 Navigator's Limit Line on Chogyo / Tiuyu Route

The maritime defense line apart, quite a few historical sources show that according to Senkaku shipping records the western edge of Ryukyu was around Kume-jima Island, while the eastern edge of China was around the Matsou Islands. The Chogyo / Tiuyu Islands midway between them were terra nullius. The current Chinese claim only mentions up to the western end of Ryukyu and ignores the eastern edge of China.

不止海防前線如此，還有釣魚臺海道紀錄，也顯示琉球西界是久米島附近，明清東界是馬祖列島附近，散見於諸多史料中。中間釣魚臺自然是無主地。目前中華人民共和國的主張，單單採用琉球西界史料，故意不理會明清東界史料。

"Tsung-saan Tshuen soen luk"(Jp. "Chuzan denshin roku", Records of truth of Ryukyu) by Tshui Poukwong (Jp. Jo Houkou) in 1719 and "Shi Laukhau Kei" (Jp. "Shi Ryukyu Ki", Record of a Mission to Ryukyu) by Lei Tingyuen (Jp. Ri Teigen) in 1800 state that Ryukyuans were early to take over as navigators around the Matsou islands in Thoiwaan Strait for heading east toward Chogyo / Tiuyu Island's waters.

據西元1719年徐葆光《中山傳信錄》、西元1800年李鼎元《使琉球記》，在臺灣海峽馬祖列島附近就已更換導航員，由琉球人擔任，前進東方釣魚臺海域。

"Tsung saan Tshuen soen luk" by Tshui Poukwong, volume 1, 22nd May 1719 (in Matsou / Baso sea area) says:

"Chin Kishou became in charge of compass, leading pilots of his country."

"Shi Laukhau Kei" by Lei Tingyuen, volume 3, 7th May 1800 (in Matsou / Baso sea area) says:

"Ri Kwan became in charge of compass, leading two pilots of his country."

徐葆光《中山傳信錄》卷一〈前後海行日記〉（康熙58年５月22日，西元1719年）：

「陳其湘率其國夥長主針」

李鼎元《使琉球記》卷三（嘉慶５年５月７日，西元1800年）：

「梁煥率其國夥長二人主針」

In the era of sail, there are no records indicate anyone starts from Fukkin (Mdr. Fujian) or Thoiwaan, arrive at the Chogyo / Tiuyu Islands, directly return to China. All ships that reached the Chogyo / Senkaku Islands invariably reached the Ryukyus and sailed back to China after waiting half a year for favorable seasonal winds. So, all who knew about the Chogyo / Tiuyu shipping route knew of the Ryukyu. If they did not know the Ryukyu shipping route, they had no idea of the Chogyo / Tiuyu one inevitably. The fact that Ryukyu officials navigated

in Chinese vessels en route to the Ryukyu indicates that Chinese were unable to independently navigate in Chogyo / Tiuyu waters.

在帆船時代，沒有一條紀錄顯示船隻曾從福建或臺灣啓碇，航行到釣魚臺，即刻西返。所有一切船隻，到達釣魚臺就必然到達琉球，約等候半年，然後乘季風返回西國。因此凡是知曉釣魚臺海道者，必然知曉琉球海道。同理，凡是不知曉琉球海道者，必然不知曉釣魚臺海道。明清船中琉球國職員擔任導航到琉球的紀錄，顯示明清國人沒有能力導航釣魚臺海域。

On the contrary, there are many records indicate anyone starts from Japan, arrive at the Fukkin coastal islands, directly go to Vietnam and return to Japan, do not go to Fukkin main land. That is the conventional route of the Red Seal Ships (Shuinsen, which hold licences of Tokugawa Shogunate). We can say Chogyo / Tiuyu islands are located in the influence area of the Red Seal Ships. Besides them, the several records that Fukkin officials navigated in Ryukyu vessels en route to the Fukkin main land, probably indicates that Ryukyuans were occasionally unable to navigate when coming close to the main land. They do not indicate Ryukyuans were unable to independently navigate in Chogyo / Tiuyu Islands water.

相反地，很多史料紀錄到船隻從日本啓程，到達福建沿岸島嶼，徑直取向越南，然後返回日本，並不到達福建本土。這是一條朱印船（德川幕府交付執照的船隻）常規航線。我們可以講，釣魚臺位於朱印船勢力領域之內。也有福建職員在琉球船中導航的一些紀錄，很可能顯示琉球人接近福建海岸時，往往不能自行導航，並不顯示他們沒有能力在釣魚臺海域自行導航。

Successive records of navigation by Ryukyu officials in Ming & Tshing envoy ships as below:

1534　Tshan Hon (Jp. Chin Kan) "Shi Laukhau luk" (Jp. Shi Ryukyu Roku)

1561　Kwok Yu-lam (Jp. Kwaku Jorin) "Tshung-pin Shi Laukhau luk" (Jp. Juhen Shi Ryukyu Roku)

1579　Siu Sung-yip and Tse Kit (Jp. Shou Sugyo & Shaketsu) "Shi Laukhau luk"

1606　Ha Tsi-yoeng (Jp. Ka Shiyo) "Shi Laukhau Luk" and "Tshuet yiu pou wai" (Jp. Satsu You Hoi)

1683　Wong Tsip (Jp. Oushu) "Shi Laukhau Tsaap Luk" (Jp. Shi Ryukyu Zo Roku)

1719　Tshui Pou-kwong "Tsung Saan Tshuen Soen Luk"

1800　Lei Ting-yuen "Shi Laukhau Kei"

歷代明清冊封使船中琉球職員導航的紀錄如下：

1534　陳侃《使琉球錄》

1561　郭汝霖《重編使琉球錄》

1579　蕭崇業、謝杰《使琉球錄》

1606　夏子陽《使琉球錄》及《撮要補遺》

1683　汪楫《使琉球雜錄》
1719　徐葆光《中山傳信錄》
1800　李鼎元《使琉球記》

There are also many envoys did not remain of any navigation records.
1631　Wu Tsing, no record of navigation
1663　Tsoeng Hok-lai , no record of navigation.
1756　Tsau Wong, no record of navigation
1808　Tshai Kwan and Fai Sek-tsoeng, no record of navigation.
1838　Lam Hung-nin, no record of navigation.
1866　Tsiu San, no record of navigation.
也有很多冊封使並未留下導航紀錄。
1631　胡靖，沒有導航紀錄。
1663　張學禮，沒有導航紀錄。
1756　周煌，沒有導航紀錄。
1808　齊鯤及費錫章，沒有導航紀錄。
1838　林鴻年，沒有導航紀錄。
1866　趙新，沒有導航紀錄。

Unfortunately, we can find no any record that indicates Ming & Tshing ships navigate by themselves in the sea area of Chogyo / Tiuyu islands.
很遺憾，我們無法發現一條明清船隻在釣魚臺海域自行導航的紀錄。
（終 End）

[4] 春分皇靈祭遡源

據平成三十年一月三十一日「尖閣480年史」部落格發文改訂

太陽運行、節日顯著者如春分、萬國同理、應自太古祭祀不絶、初無文字載及之。英吉利巨石陣（Stonehenge）是也。乃我皇室以春分為春季皇靈祭日、何以春分而祭皇祖也。何時始見諸載籍也。檢『宮中三殿竝に祝祭日解説』（皇典講究所編、國晃館大正元年刊）第百十三頁、以『日本書紀』神武四年二月二十三日（甲申）條為「或可謂春分始原」、未斷案焉。『日本書紀』原文、

（神武）四年春二月、壬戌朔。甲申、詔曰、「我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬。今諸虜已平、海内無事。可以郊祀天神、用申大孝者也。」乃立靈畤於鳥見山中、其地號曰上小野榛原·

下小野榛原、用祭皇祖天神焉。

依今之曆算家、陰曆此日為現行額我略陽曆三月三十一日、偏離春分多日、遽難定為春分始祭皇祖之年。鳥見山約位於奈良盆地南域（橿原、大和三山等）之東、由盆地隔三輪山為鳥見山。

復有一則、似為春分祭皇祖者、崇神七年二月十五日、詔祭三輪山大物主。『日本書紀』云、

七年春二月、丁丑朔。辛卯、詔曰、「昔我皇祖、大啓鴻基。其後聖業逾高、王風轉盛。不意今當朕世、數有災害。恐朝無善政、取咎於神祇耶。盍命神龜、以極致災之所由也。」於是天皇乃幸于神淺茅原、而會八十萬神、以卜問之。是時、神明憑倭迹迹日百襲姫、命曰、「天皇、何憂國之不治也。若能敬祭我者、必當自平矣。」天皇問曰、「教如此者誰神也。」答曰、「我是倭國域内所居神、名爲大物主神。」

此詔祭大物主神如皇祖、而依今人算曆為陽曆三月十二日、恐難定為春分。使十日後始行幸神淺茅原（今櫻井市茅原三輪山）、則似可通。近人亦以為三輪山與春分相關甚深、見昭和四十八年小川光三『大和の原像、知られざる古代太陽の道』、平成十一年鎌田東二『聖地への旅、精神地理學事始』等。且『日本書紀』撰者考索神武･崇神曆日、未必精覈、不可以其失春分日而遽謂非春分也。

曆日始見精覈者、向擬推古天皇十二年（西曆六百四年）。今檢國立天文臺「曆 wiki、傳來から宣明曆まで」網頁、敘古綦詳。平安京中葉『政事要略』引「儒傳」諸書有云「推古天皇十二年正月朔、始用曆日。」惜「始用曆日」之語、不見於『日本書紀』。

越三年、當推古天皇十五年（西曆六百七年）秋、遣小野妹子入隋、國書稱「日出處天子致書」、「海西菩薩天子重興佛法」。是年春『日本書紀』卷二十二曰、

十五年春二月、庚辰朔、定壬生部。戊子、詔曰、「朕聞之、曩者、我皇祖天皇等宰世也、跼天蹐地、敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤。是以陰陽開和、造化共調。今當朕世、祭祀神祇、豈有怠乎。故群臣共爲竭心、宜拜神祇。」甲午、皇太子及大臣、率百寮以祭拜神祇。

據岩波古典文學大系「校異」、此詔諸本全無異文。所據本有京都國立博物館藏卷二十二寫本、乃推古紀最古寫本、向定為國寶。亦有宮内廳書陵部藏古寫本。

詔文内戊子為陰曆二月九日、而祭於甲午、為陰曆二月十五日。據内田正男『日本曆日原典』（昭和五十年雄山閣）、此當儒略曆三月十八日、可換算為現行額我略曆三月二十一日。是為春分宜無誤。推古詔祭春分、與神武・崇神詔祭皇祖、文辭相類、可據推古詔以推神武・崇神亦詔祭春分。

陰陽開和、為語稀見、或謂「陰陽諧和」之誤、然「陰陽諧和」亦不見於古、「陰陽和諧」則有之。唯「陰陽開和」文極順、而意極奇。蓋陰陽之相對也、有浮有沈、一剛一柔、相生相克、非開且和也。陰陽而開且和、乃吾日本自繩文以下渾然一邦、不分族類、國體永續、始得有之。

陰曆二月十五日為望日、釋俗以是日為涅槃會。津田左右吉及坂本太郎共立臆説、謂是時推古祭佛、非祭神也。又謂推古原詔本釋典語法、『日本書紀』撰者擅竄之為神教語也。詳津田左右吉『日本古典の研究』岩波版下册第四篇第三章第九十七頁、第四章第百十六頁、及坂本太郎『聖德太子』、吉川弘文館昭和六十年版、第九十九頁。

雖然、今人曆算既已審定是日為春分、則津田・坂本臆説不通、而明治以下春分例祭皇祖、當以本詔為始、不待竄文也。必使『日本書紀』撰者冒大不韙、自詔下僅百年、即敢任意竄文、是撰者

握權極大、何不並竄二月甲午為他日。後人擅疑前人竄文、往往謬判如是。

推古紀所載史事多關釋氏、且憲法十七條亦不述及神教。唯本詔獨以神教為主、顯著特異。平田篤胤以聖德太子重佛、遂疑本詔乃推古天皇親定、旨在不可重佛泰甚、非聖德太子意也。説見篤胤門弟子飯田武郷『日本書紀通釋』第四册、大鐙閣大正十一年至十五年刊。

平田篤胤為學獨樹一幟、常人不至穿鑿如是。物集高見以為太子雖重釋氏、而不全廢神教、遂得有是詔。黒板勝美亦謂本詔乃所以見神佛並重於世。高須芳次郎説復略同物集氏。詳物集高見『勅語逢原』明治四十五年、及黒板勝美『聖德太子御傳』大正十二年初刊、昭和十四年『虚心文集』第二册重録。並高須芳次郎『大日本詔勅謹解』第四册、日本精神協會、昭和九年。且勿論其出太子之意或女帝之意、而平田・物集皆謂推古朝神佛並重。今人算暦定春分、彷彿贊平田物集之説於無意中。

高須氏引安積澹泊『推古帝論』、當是『大日本史論贊』、向疑為安積澹泊所撰。水戸儒家往往評推古天皇崇佛為惑溺、高須氏遂駁之也。

太古河洛亦有春分。孔穎達『禮記正義』卷四十七「祭義」曰、

「祭日於壇」、謂春分也。「祭月於坎」、謂秋分也。

周王祭祀日月之禮如此、而日本春秋分並祭皇祖、非出河洛也。春秋分原出太陽暦法、周王祭日、本屬自然。秋分祭月則非太陽暦、當是中秋節俗浸潤秋分所致。蓋陰暦八月十五日約與陽暦九月二十二日相先後、遂相混耳。今我邦以九月十五日為敬老節、亦當源自中秋節俗。『禮記·月令』曰、

仲秋之月養衰老。

陰暦八月約當陽暦九月、遂以九月十五為敬老日。其意與秋分祭月略同。

小川清彦嘗精考『日本書紀』暦日、内田正男據以疏理之、為現時定本。近年木庭元晴評之極高。詳木庭元晴「飛鳥時代推古朝による天の北極及び暦数の獲得」(關西大學博物館紀要第二十二號、西暦二千十六年刊)。木庭氏文中謂額我略暦六百三年三月十九日為推古十一年春分、其實乃儒略暦、閲者須留意。

(2018年10月 3 日受理)